

ラブライブ！サンシャ
イン！！～もう一度輝
くために～

マッシブ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

静岡県沼津市にある内浦という町で育った少年、望月夜空（モチヅキヨゾラ）。彼は中学に東京にある野球の強豪にスカウトされ入学するがとある事故により投げる事が出来なくなってしまった。

もう一度投手として輝くために……海の女神達と共に輝きを求め歩んでいく物語が始まろうとしていた

OP Brand New Sky (Aquours cover)

ED ユメ語るよりユメ歌おう

目次

第7話	111	番外編	278
第6話	97	黒澤ルビイ誕生日記念特別編	271
第5話	85	桜内梨子誕生日記念特別編	259
第4話	70	高海千歌誕生日記念特別編	244
第3話	57	第16話	226
第2話	52	第15話	213
第1話	43	第14話	194
プロローグ	33	第13話	175
First Season		第12話	157
野球設定集	16	第11話	146
主人公設定or記憶の一部	1	第10話	133
		第9話	122
		第8話	

望月夜空誕生日記念特別編	289
クリスマス特別編	298
謹賀新年特別編	309
松浦果南誕生日記念特別編	320
バレンタイン特別編	327
国木田花丸誕生日記念特別編	338
ホワイトデー特別編	347
渡辺曜誕生日記念特別編	353
小原鞠莉誕生日記念特別編	359
津島善子誕生日記念特別編	370

主人公設定 or 記憶の一部

望月夜空（モチツキヨゾラ）

誕生日 9月23日。

イメージCV：入野自由

静岡県沼津市内浦生まれ。

高校1年からは東京住み

黒髪のショートで癖っ毛が特徴。

野球やつてる割にはガタイがいいわけではなく、高身長でスラッとした体型をしている。
る。

身体の柔軟性は抜群に高いので怪我の確率は低い。

性格はマイペースで真面目な性格。

感情をあまり出さず心で泣くことが多い。

物事には常に全力で挑む。

相手への対抗心が強いことも。

意外と女子力が高く、家事、料理をこなす。

サンドイッチとナポリタンが大好きで特にナポリタンは自分で作るほど好き。

嫌いな食べ物ハカポチャ。

出されると全力で拒否。

好きなアーティストは Silent Siren。

地元でやっていたプロ野球の試合を家族で観戦した時に野球に興味を持つ。

小、中、高と投手一筋。高校からのメンタル面の問題が原因で経験のないファースト、外野へと一時期守ることに。

150 km/h オーバーのストレート、キレがある変化球を持つ為、奪三振率が高い。また打者としても魅力を感じられ、まさに二刀流の存在でもある。

千歌、曜、果南とは幼なじみ。

小さい頃、よく4人で遊んだりしていた。

梨子とは東京にいた時、近所関係で知り合った同級生。彼女のピアノの演奏にはいつも元気付けられた。

鞠莉、ダイヤは夜空に取って頼れるお姉さんのな存在。

よく勉強に感じて夜空をサポートしてくれていた（鞠莉は英語、ダイヤは現代文、社会など）。

花丸、ルビィ、善子とは可愛い妹的な存在。

花丸はよく野球の本を読んで夜空に薦めたりしている。

ルビィはアイドルに無能な夜空にアイドルの知識を教えている。ちなみにルビィは夜空を兄と慕っているので恐怖心はない……はず。

善子は自称墮天使ヨハネと名乗っているわりには夜空に憧れを持ち、夜空と共にバツティングセンターに行ったり、試合観に行ったり、世間で言うリア充を満喫したいと思っている。

ちなみにバツティングセンターでボールには1回も当たりはしなかったらしい。

く野球能力く

右投左打

ポジション：投 一 外

打撃フォーム：スタンダード

弾道：3

ミート：C

パワー：B

走力：B

肩力：A

守備力：D

捕球：D

く投手能力く

フォーム：オーバースロー

適正：先中抑

球速：156 km/h ↓ ???

コントロール：C

スタミナ：B

変化球：スライダー カーブ フォーク

???

ここはどこなんだろ……。

目を開けると俺は知らない空間にいた。

「気がついた？」

どこからか声がした。

女の子の声だ。

「ここは君の記憶の世界だよ」

記憶の世界……？

「今から君に懐かしい記憶の一部を見せてあげるね」

すると眩い光が俺に襲いかかってきた。

千歌「夜くん遊ぼー!!」

曜「夜くんが鬼ー!!」

果南「ほらほら夜空捕まえてごらーん！」

夜空「待てー!!このー!!」

これは……小さい頃の俺が千歌、曜、そして果南姉と遊んでいた時の記憶……。

梨子「どうだった？」

夜空「うん、聴いててとてもリラックスできたよ」

梨子「フフツ。ありがとう」

夜空「これでまた練習頑張れるよ」

梨子「あまり無理はしないでね」

これは梨子との記憶の一部か。

梨子のピアノのおかげでこうしてリラックス出来るんだよな。

鞠莉「ノンノン！ここのスペルはこう書くのよ！」

ダイヤ「鞠莉さん！夜空さんにくつつき過ぎですわ！」

鞠莉「そういうダイヤだって夜空にくつつき過ぎじゃないかしら」

ダイヤ「なんですすつて〜!?」

鞠莉「ダイヤったら大胆」

ダイヤ「まあ〜りさ〜ん」

鞠莉「ワァーオ!逃げろー!」

ダイヤ「待ちなさい!!」

夜空「(あれ……勉強は……?)」

この記憶は鞠莉姉とダイヤさんとの勉強会か。
結局あれで俺の勉強はあまり進まなかつたな。

花丸「はい！夜空兄！」

夜空「おつと……マルちゃんこれは？」

花丸「野球やっている夜空兄の為に集めたマルおすすめの本達ずら！」

夜空「ありがとうマルちゃん」

花丸「後で感想聞かせてね♪」

ルビイ「夜空お兄ちゃん！早く早く！」

夜空「ちよつと早いよルビイちゃん……」

ルビイ「早くしないとお渡し会終わっちゃうよ！早く早く！」

夜空「わかったから服を引っ張らないでくれ」

善子「見てなさいムーン！この墮天使ヨハネが闇の魔力を発動し、相手から放つ光の球を打ち返して見せるんだから！」

数分後。

善子「ぐすつ……」

夜空「結局、1球も当たらなかつたな」

善子「ううつ……」

夜空「ほら、ジューズ奢つから元気だして？な？」

マルちゃんからもらつた本、今でも読んでいるんだよな。夢中に読んでいると1日が終わってしまうんだよ。時間つてのは本当あつという間。

ルビィちゃんとはアイドルとのお渡し会。

はしやぎすぎたルビィちゃんは最後電車でぐっすり寝てしまったんだっけ。
姉のダイヤさんの苦勞がわかるよ。

善子とはバツティングセンター。

あいつ訳わからないこと言ってやる気満々だったのはいいけどまさか全球当たらな
かったとはな。

今度あいつに打ち方教えてやるか。

「どうだった?」

記憶の一部を見せ終わった後、また話しかけてきた。

ああ、とても懐かしかったよ。

ありがとう。

「フフツ。どういたしまして」

最後にひとつ聞いてもいいかな？

「なーに？」

君は一体……うわっ……。

何か聞こえたかと思ったその時、俺に眩い光が襲いかかってきた。

夜空「……………」

目が覚めたその時、もう早朝の時刻だった。

あの時の夢は一体……。

俺は疑問に思いながらもジャージに着替え、ランニングへと出かけていった。

野球設定集

く2年生く

寺田守（テラダマモル）

沼津海星のチームを纏める4番キャッチャーでキャプテン。

試合前、後には投手陣を集めてミーティングを行う。

スコアブックを見るのが好きで学校の教室では休憩時間を利用してスコアブックに目を通し、常に試合へ意識している。

キャッチャーのリード力、打撃のセンスはプロも認める潜在能力。

く野球能力く

右投左打

フォーム：スタンダード

ポジション：捕

ミート：C

パワー：S

走力：D

肩力：A

守備力：B

捕球：C

倉本和希（クラモトカズキ）

静真高不動のスイツチヒッター。

50m5・9秒の俊足を持つリードオフマン。

塁に出れば次の塁を透かさず狙う。

見た目はヤンキーみたいな感じだが真面目な性格。

セカンドの小宮とは息の合った守備を見せる。

〈野球能力〉

右投両打

フォーム：スタンダード

ポジション：遊

ミート：C

パワー：D

走力：S

肩：C

守備：B

捕球：B

小宮涼真（コミヤリヨウマ）

笑顔が特徴の選手。

だがその裏はズバツと吐く毒舌キャラ。

そのキャラに困惑するチームメイトも多々いるらしい。

シヨートの倉本とは良いコンビ。

練習相手も常に共に練習している。

バットに当てる技術が高く、ピッチャーが嫌がる粘りを見せる。

く野球能力く

右投左打

フォーム：オープン

ポジション：二

ミート：A

パワー：E

走力：C

肩力：D

守備：A

捕球：B

伊藤純（イトウジュン）

強肩強打が特徴。

クリーンナップを打ち、スイングはでたらめだが右打ちが得意とする。

普段から目付きが怖く怒ると口悪いがアイドルが大好き。

好きなアイドルはパスペレの白鷺千聖。

＼野球能力＼

右投右打

フォーム：スタンダード

ポジション：外（中堅）

ミート：B

パワー：B

走力：C

肩力：A

守備力：C

捕球：C

田島聡（タジマサトシ）

いつも笑っているチームのムードメーカー。

彼が盛り上げると自然とチーム内も明るくなる。

筋トレが大好きで寺田とはウエイトのメニューを組んだりしている。

鉄壁の守りで強い打球を身体張って止める。

打撃面でも長打が期待できる。

筋肉の付けすぎもあり、足がかなり遅い。

〈野球能力〉

右投右打

フォーム：スタンダード

ポジション：三

ミート：D

パワー：B

走力：E

肩力：C

守備力：C

捕球：D

大槻拓海（オオツキタクミ）

静真のエース。

マイペースで普段何を考えているのかわからない不思議な雰囲気を持つ。

マウンドに上がると雰囲気が一変し、別人に。

ノビのあるストリートに下に曲がる縦のスライダーを決め球に投球を組み立てる。
スタミナ不足が鍵だが完投できなくはない。

く野球能力く

右投右打

フォーム：オーバースロー

ポジション：投

適正：先

球速：148 km/h

コントロール：B

スタミナ：D

変化球：縦スラ、カーブ、カットボール

赤田将吾（アカダショウゴ）

大概お気に入り投手1号。

先発、中継ぎをこなす万能投手。

リリーフが多いが大概がピークな時は代わりに先発を任せられる。
リリーフの失敗率は低い。

主にロングリリーフが多く、スタミナには自信あり。

投球は武器のシンカーを軸に組み立てる。

〈野球能力〉

右投右打

フォーム：オーバースロー

ポジション：投

適正：先 中

球速：140 km/h

コントロール：D

スタミナ：B

変化球：シンカー スライダー フォーク

高田健人（タカダケント）

大槻お気に入り投手2号。

球速はそれほどではないが武器のチェンジアップがエグい程、球速差が激しい。

サウスポーだが左打者にはもともと強く左キラーとして起用している。

赤田と同じくりりーフが多い。

く野球能力く

左投左打

フォーム：サイドスロー

適正：先 中

球速：135 km/h

コントロール：C

スタミナ：C

変化球：チェンジアップ カーブ スライダー

茂木祐二郎（モギユウジロウ）

チームの代打の神様。

大事な場面での代打を多く任される。

代打での打率はとても高く、監督からは良い信頼を得ている。

く野球能力く

右投左打

ポジション：遊 三

フォーム：スタンダード

ミート：B

パワー：B

走力：D

肩力：C

守備力：C

捕球：D

牧野忍（マキノシノブ）

チームの代走の神様。

茂木が出塁すると交代で代走として送られる。
俊足は倉本に衰えていない。

く野球能力く

右投右打

フォーム：スタンダード

ポジション：外

ミート：D

パワー：D

走力：A

肩力：C

守備力：C

捕球：C

〈1年生〉

日向咲也（ヒナタサクヤ）

練習を熱心に取り組む努力家。

入部したての頃は高校野球の洗礼を受け、挫折したが誰にも負けたくない意志が強く、練習に取り組んだ結果がレギュラーとなった。

勝負強いバッティングを得意とし、チームのラッキーボーイ的存在。

〈野球能力〉

右投右打

フォーム：スタンダード

ポジション：外（左翼）

ミート：B

パワー：C

走力：C

肩力：C

守備力：D

捕球：D

平林雄介（ヒラバヤシユウスケ）

小柄だが對抗力が強く、打席に立つと物凄く怖い恐怖の9番バッター。

身長がチーム1小さいが、その小柄を生かして自分の野球センスを磨いている。

右投左打

フォーム：オープン

ポジション：外（右翼）

ミート：C

パワー：C

走力：B

肩力：B

守備力：C

捕球：D

中田寿樹（ナカタトシキ）

バッティングが大好きな長距離砲。

夜空が入って来るまではファーストのレギュラーだったが夜空加入後、レギュラーから外される。

だがそれが彼を後押ししたように対抗心が燃え、夜空とのレギュラー争いになる。

毎日バットを300回振ることを日課にしている。

〈野球能力〉

右投右打

フォーム：スタンダード

ポジション：一

ミート：E

パワー：B

走力：E

肩力：E

守備力：D

捕球：D

塩見竜也（シオミタツヤ）

関西出身の1年生。

お笑いが大好きで笑点を欠かさず毎週見ている。

走攻守三拍子揃ったプレーを見せつける。

かなり大きな声が特徴。田島にも負けてはいない。

外野は主にセンターを守り、守備の範囲が広い。

く野球能力く

左投左打

フォーム：オープン

ポジション：外

ミート：C

パワー：C

走力：B

肩力：C

守備力：C

捕球：C

小松原稔（コハツバラミノル）

チームのクローザー。

皆からは「困った時はコマツバーラ」と命名されている。

先発に自信がなく、監督からクローザーを任されるとそれが見事に開花した。

1年生ながらMAX146Km/hをマークし、変化球もスプリットを駆使して組み立てている。

かなり内気だがクローザーとしてマウンドに託されてる以上前向きになるよう努めている。

く野球能力く

右投右打

フォーム：オーバースロー

ポジション：投

適正：中 抑 先

球速：146 km/h

コントロール：C

スタミナ：D

変化球：スプリット スライダー シュート

戸田郁（トダイク）

1年生を纏める次期キャプテン候補。

キャッチャーとしての能力は寺田もお墨付き。

リード力は寺田に負けておらず、いずれ2年生投手も引つ張って行きたいと思つてい
る。

夜空とはリハビリの関係で共に投手練習を行っている。

〓野球能力〓

右投右打

フォーム：スタンダード

ポジション：捕

ミート：D

パワー：D

走力：D

肩力：B

守備力：B

捕球：B

First Season

プロローグ

俺は……何してゐるんだろう……。

真冬の空の下……俺こと、望月夜空は外野の方で走っていた。

他の皆はノックやティーなどのメニューをこなしているのに……。

俺は外野の方で下半身トレの基礎であるランニング……。

「くそっ……」

悔しがる俺は走るペースを緩めることなく走り続けた。

なぜ、俺が今この状態かというと数カ月前のことに戻る

あれは夏の大会決勝での出来事だった。

俺は静岡県沼津市にある内浦って町で育った。

そして親と一緒にプロ野球の試合を見に行き、野球というスポーツに興味を持ち始めた。

そして小学、中学で投手として活躍し、東東京の強豪のスカウトに声を掛けられた。

その強豪は東東京で5本の指に入る位の实力を持つ高校だった。

入学当初の俺は2軍スタート。

高校初めての試合、2軍戦であつたが先発し、7回無失点という記録、三振を二桁とつてアピールした。

その実力が実つたのか俺は夏の大会に一軍に昇格し、背番号18として選ばれた。

そして夏の大会、俺はリリーフで投げながらも好投を続け、チームも決勝まで勢いが

止まらなかった。

しかし、事件は決勝戦で起きた

夜空「……………!!」

9 回裏の最終回 2 アウト……………。俺は相手バッターの頭部に……………。

ぶつけてしまった……………。

その後、後続を託されリリースした先輩が打たれてしまいチームはサヨナラ負け。甲子園出場とはならなかった

そして新チームが始動した。

だが俺はなぜか調子が上がらなかった。

「ボールフォア！」

夜空「くそっ……」

キャッチャーの構えたところにボールが行かない。

カキーン！

夜空「あつ……」

甘く入った球威のない球を打たれ、相手に追加点を許してしまう。

夜空「あつ……あ……」

試合中に突然頭が白くなり身体が震えだす。

俺は思った。俺は……投げるのが怖くなった……怖くなってしまったんだ。

秋の大会は俺が試合を壊した為、チームの連続選抜出場とはならなかった。

翌日、練習終了後に監督に呼ばれた。

その場で告げられた内容とは。

“お前は明日から別メニューだ。来年までボールに一切触れるな。オフシーズンは下半身中心のトレーニングを行え。”

俺は春大の構造から外されたのだ。

そして今現代における。

夜空「……………。思い出したくもないや……………」

そう思いながらも俺は走り続けた。

そして、時は流れ、数カ月がたった。

夜空「ただいま」

部活から帰った俺。

今日もランメニューと体幹しかやってないけど。

夜空母「おかえりなさい」

夜空父「おかえり」

ん？父さんの声。

いつもは帰り遅いのに……今日は珍しいな。

夜空父「夜空、父さんと母さん、お前に話があるんだ。着替えてからでいいから後でリビングにきなさい」

夜空「……？わかった」

話があるってなんだ？

俺は部屋に戻って着替えを済まし、リビングへ降りた。

夜空父「実は父さん海外の方に仕事が決まったんだ」

夜空「えっ？海外？」

夜空父「ああそうだ、会社でプレゼンが成功して海外の方から働いてみないかってスカウトされてしまったてな」

なんとという急な出世なんでしょうか……。

父さんは科学研究者で色んな物質などを取り扱っているからその結果うまくいったのだろう。

でもなんだろう、母さんが暗い顔してる。

夜空父「それに伴って、母さんもついて行くことになった」

まあ母さんのサポートも必要だからな……。

夜空「俺は……どうなるの」

そう、残るは俺1人。

正直、1人で暮らして行く自信なんてない。

家事、料理は出来るが、部活と勉強との両立なんて絶対に無理だ。

夜空父「それならもう決まっている」

そして父さんはこう言った。

夜空父「夜空、じいちゃんのいる内浦へ行け」

高校2年生になり数ヶ月後、俺は東京から静岡へ行くため新幹線に乗っていた。夜空「何年ぶりの静岡かな……。そういえば皆元氣していたかな」

俺は幼なじみや知り合いのことを思いながら新幹線の窓を眺めていた。

―続く―

第1話

夜空「ふう……」

東京から静岡まで数時間。

俺は電車を乗り継いで沼津へ到着した。

夜空「ここからは確か、バス移動か」

正直ここまで来れば座りつぱ続きが続くが下半身のウエイトのおかげか、そんなに攻撃的な痛みはこない。

このまままた投げてみたら今までより速いボールが投げられるんじゃないかと思うけど俺にそんな強い欲はないのは数秒でわかった。

ため息しながらも内浦行きバスが来たから乗るとしよう。

夜空「着いた……」

バスに乗り、数分の如し、俺は内浦に到着した。

懐かしいのか久しぶりなのか、内浦の海を眺めると心がやすらいでいく。

夜空「着いたから迎え呼ぼうかな……」

俺はスマホを取り出し、操作する。

電話帳を操作していると1つの名前を見つけ、発信する。

“プルルルル……”

夜空「……………」

出ない……。

何しているんだか、もしかして仕事しているのかな、もしかして寝てるとか。

コールが続くが出なかった為、電話を切った。

数秒後。

夜空「……………！」

スマホが震えだした。

どうやら着信が入ってきたみたいだ。

夜空「もしもし」

『ごめんごめん！もしかしてもう着いちやった？』

夜空「もう着いたよ」

『わかった！もう少ししたら迎え行くから待ってて！』

夜空「了解。ゆっくりでいいよ」

通話を切り、俺は近くのベンチに座り込み、空を見上げる。今の俺、どこから見ても上の空だよね。

「ごめんごめん！遅くなっちゃって」

夜空「いいよ、気にしてないし」

数分後に迎えがきてその車に俺は今乗っている。

運転しているのは俺の従姉、加美奈姉さんだ。

加美奈姉さんは俺の母さんの妹で今は内浦で仕事しながらじいちゃん和暮らしている。

夜空「そうだ、姉さん、あれからなんか変わったことあった？」

加美奈「そうね。最近良くあの2人が遊びに来てるわよ」

夜空「あの2人？」

加美奈「千歌ちゃんと曜ちゃん」

へえ。懐かしいな。

良く小さい頃遊んでいたっけ。

“夜くん遊ぼー!!”

昔を思い出す度にふふっと笑ってしまふ。

俺もまだまだ子供だね。

加美奈「夜空、そろそろ着くよ」

夜空「うん」

加美奈「ほい、到着」

夜空「ありがとう、姉さん」

俺は車から降り、んーと背伸びした。

「おお、来たか。長い時間、苦労様」

夜空「久しぶり、じいちゃん」

出迎えてくれたのは孝蔵じいちゃん。

俺に……野球を……投手というのを教えてくれた大切なじいちゃんだ。

孝蔵「お前の荷物は部屋に届いておるぞ」

夜空「うん、ありがとう」

孝蔵「それと、惜しかったな都大会」

夜空「……………」

孝蔵「負けたのが悔しいのはわかる、じゃがまだ始まったばかりだ。お前にはこれから先がある。切り替えてまた頑張ればいいんじゃないよ」

夜空「うん……」

言えないよな。

あの試合から怖くて投げることが出来ないってこと。

俺は部屋の荷物を整理するため家の中へ入った。

『いんにちはー!!』

加美奈「おつ？千歌ちゃん、曜ちゃんいらつしやくい」

千歌「これ、回覧板！あとみかん持ってきた！」

加美奈「わざわざありがと〜」

孝蔵「おお、また来たのか」

千歌「孝蔵おじいちゃん！」

曜「お邪魔しているであります！」

孝蔵「お前達にびつくりさせたのがあるんじゃない。2階の夜空の部屋へ行ってみい」

千歌「わかった！行こう曜ちゃん！」
曜「ヨーソロー！」

夜空「懐かしいな……」

周りには野球のスポーツバック、練習用ユニホーム、ピッチャー用のグラブなど置いてある。

中には俺が良く大切にしているもの、それは

夜空「ふふっ……」

千歌と曜、そして果南姉との写真だ。

懐かしいな、これ中学の県大会優勝の時の写真だっけ

写真を眺めていると

“ドタドタドタ”

と足音が立てている。

どうやら俺の部屋に向かっている。

ガチャッと扉が開くと俺が見たのは……オレ「みかん色！」……みかん色してアホ毛がピンと跳ねている髪型をしている女子とグレーの髪色してボーイッシュな女子だっ

た。

夜空「千歌、曜……」

千歌「夜くん……?」

曜「えっ?夜くん?」

夜空「久しぶり……だね」

千歌、曜『夜くんー!!』

夜空「えっ……ちよっ……うわあ!」

やっぱり、抱きついてくるよね……。

千歌「本当に夜くんだよね!」

夜空「うん、そうだよ」

曜「もう寂しかったんだからね!」

夜空「うん、でもなんで急に遊びに来たりしていたの?」

千歌「えっ?えっとそれは……その……」

曜「千歌ちゃんが夜くんの家行けば夜くん帰ってきているかもしれないって聞かなくてね、でもないなかったら夜くんの部屋にある写真見て笑って帰って行っているけどね」

千歌「もう!曜ちゃん!／／」

千歌が顔を真っ赤にして曜をポカポカ叩いている。

尊すぎ……。

夜空「でもこうしてまた帰ってきたんだ、いつでも遊びに来ていいよ」

千歌「いいの!？」

夜空「うん、もちろん」

曜「はいはいはい!私、夜くとまたキャッチボールしたい!」

………!

千歌「……?夜くん?」

夜空「えっ?ああ、キャッチボールね、時間ある時やろうよ」

曜「やった!約束ね」

夜空「うん、約束」

千歌「………」

千歌は思った。いつもの夜くんだったらキャッチボールに対して元気にやろうって
いうのに何かおかしいと。

曜「千歌ちゃん?」

千歌「ふえ!？」

曜「どうしたの?怖い顔して」

千歌「なっ……何でもないよ!ああ!もうこんな時間!早く帰らないと美渡姉に怒ら

れる！」

曜「本当だ！千歌ちゃん行こう！」

千歌「うん！それじゃ、夜くん！」

夜空「気を付けてね」

曜「ありがとう！じゃあ、千歌ちゃん！」

千歌「うん！」

千歌と曜がせーのの掛け声に合わせて

“夜くん！おかえりなさい！”

夜空「ただいま」

元気の良い2人に会えて嬉しかったな。

ただいま……千歌、曜。

―続く―

第2話

俺が内浦に帰ってきて数日が経過した。

ここ最近毎日のように千歌と曜が家に来ている。

話を聞くとスクールアイドルというのを始めたとか。

千歌と曜が通っている学校、浦の星女学院は毎年度生徒人数が減っているとか。

それを阻止、そして自分達の輝きを見つげるために始まったとか e t c ……。

良く晴れた朝5:30の時間。

俺はベッドから起き、眠い目擦りながらもジャージに着替える。

そして外に出て軽く体操して走り始める。

これは俺の日課、早朝ランニング。

ボールが投げられない分出来るのがこれぐらいしか限らないからね。

「おはよう、頑張ってるね」

夜空「おはようございます」

早朝の散歩している人に挨拶され、それを返し、ランニングの続きをする。

挨拶されたら返す、これは礼儀として大切なこと。

淡島の風が吹く中、走っている俺。

本当に懐かしい、俺は帰ってきたんだなって思った。

しばらく走っていると俺の目の前に階段が現れる。

この階段は淡島神社に繋がっている階段。

その階段の数が何段あるのかわからない、つてか数えたくもない、疲れるだけ。

夜空「よし……！」

軽く気合いを入れ階段を上り始める。

夜空「はあ……はあ……はあ……はあ……」

もう少し……後少し……。

夜空「上り……きつた……」

さすがにやっぱ、キツイ……。

「え……？」

夜空「え？」

不意に声がした。

声がした方を向くと髪色が青く、ポニテをした女子。

「夜空……う？」

夜空「果南姉……？」

果南「夜空!!」

夜空「うわあ!」

果南姉は俺を見て走ってきておもいつきりハグ……つてか苦しい……。しかも柔らかいもの当たってるし……。

果南「本当に夜空だよね……。夜空だよね……」

夜空「そうだよ……。真正正銘の望月夜空だよ……」

果南「もう会えないと思ってた……。帰って来てくれて嬉しいよ……」

夜空「果南姉……。もう限界……。苦……。しい……」

果南「ああ!ごめん!」

夜空「はあはあ……」

しっ……。死ぬかと思った……。

果南姉のハグはやっぱり強烈だよ……

果南「つて夜空はなぜここに？」

夜空「毎日の日課、ランニング」

果南「ふーん、いつの間に」

夜空「野球は下半身良く使うからね」

果南「じゃあさ、これから毎日毎朝一緒に走らない？」

夜空「果南姉がいいなら付き合うよ」

果南「じゃあ、決まりだね。待ち合わせはどうしよか」

夜空「バス停ら辺でいいかな」

果南「OK。じゃあ、私お店開けないとならないから」

夜空「うん、じゃあまたね」

果南姉はルンロンと走って降りて行った。

果南姉の家はダイビングショップで怪我している果南姉の父さん変わりとして経営しているらしい。

誰もいなくなった淡島神社。

俺はポケットにしまっていたタオルを取り出す。

夜空「ふう……」

息を吐き、投球モーションに入る。

そしておもいつきり腕を振る。

この練習方はシャドーピッチングと言う、ボール投げられない分出来る練習の1つで

ある。

その練習を30分程度繰り返してやっていた。

やっぱり……投手としての自覚がまだ残っているのかな……。

ボールが思うように投げられないのに……。

夜空「ただいま」

早朝トレーニングが終了し、家に帰った俺。

するとドタドタと玄関まで走りくる音が聞こえてくる。

加美奈「夜空く！」

加美奈姉だ。

夜空「どうしたの？」

加美奈「夜空宛に郵便があるよ」

俺宛に郵便？

本当だ、望月夜空様って書いてある。

実はこの封書が俺の運命を変えようとなる時はこの時は思っではいなかった。

第3話

加美奈姉に封書を受け取った俺は階段を上がり、部屋に入った。

夜空「えーっとハサミハサミーっと、あつた」

机の引き出しからハサミを取り出し、封書を切り始める。

封書に入っていたのは一枚のプリント用紙。

用紙にはこう書かれていた。

“望月夜空様”

この度、貴方様を浦の星女学院共学テスト生として転入学させることを承認致します。また手続き等に関しましては詳細を良くご確認の上、等学院の方へお越しくくださるようよろしくお願い致します。

差出人の名前は……。

夜空「!!」

なっ……なんで……。

浦の星女学院理事長 小原鞠莉。

夜空「なんで鞠莉姉から……」

♪

夜空「!」

俺の携帯の着信音になる。

電話主は父さんだった。

夜空「もしもし」

夜空父「おお、夜空か。その様だともう聞かなくてもいいようだな」

夜空「どういうこと？」

夜空父「いやー父さんのプレゼンに評価をくれた偉い社長さんが息子さんどうですかって推薦が来たんだよ。プレゼンが成功したのはその人のおかげだからなかなか断れなくてな」

はっはっはと電話越しで笑う父さん。

このお人好しが……。

夜空父「手続き等に関してはもう話してあるみたいだから明日行って確かめてくるといいぞ。それじゃあ、父さんは戻るからな。女子校だからってあまり羽目を外すんじゃないぞ！」

そう言い、電話が切れた。

加美奈「なるほど。浦女の転入案内だったのね」

俺はその後封書の確認したこと、父さんとの電話のことを加美奈姉に話した。

加美奈「話によるとね、浦女は年々生徒の数が減ってきているみたいなの。それで学院側は共学を考えているみたいなんだって」

そういい、加美奈姉は紅茶を飲む。

しかし、驚いたのは鞠莉姉が浦女の理事長ってことだ。

多分お金の力なんだよな。

加美奈「それで、どうするの？この辺だとあんたが入る学校は浦女しかないわよ？」

夜空「えっ、そうなの？」

加美奈「内浦は田舎町、通える学校もあまりない。仮に浦女に入学したらあんたはもう野球どころか甲子園にも行けないのよ？それでもいいの？」

浦女に入れば野球はできない。

その言葉が頭を過る。

夜空「……………」

俺は黙ってしまった。

数秒後、口を開く。

夜空「俺、浦女に行く」

加美奈「……………。いいの？」

夜空「うん」

その理由は……。

“しばらく野球から離れて平凡な学校生活を送りたい。”

という答えだった。

次は浦の星女学院前→浦の星女学院前。

夜空「ん。着いた」

翌日、俺は手続きを済ませるため浦女行きのバスに乗って向かっていた。

バスを下り、学院へと続く坂道を登っていく。もちろんトレーニングしているので下半身に負担はない。

つてかこの坂道、ダッシュトレーニングに最適だな。

登りきり、校門前に着く。

しかし、校門前には人の気配がない。

夜空「しばらく待つか」

俺はしばらく校門前で待つことにした。

数分後。

「お待ちせしました」

声が聞こえた。

しかし聞いたことある声だな。

振り向くとそこには見覚えある人の姿が。

夜空「ダイヤさん……」

ダイヤ「あら？なぜ私の名を……って夜空さん!？」

夜空「やっぱりダイヤさんだ。久しぶりですね」

その人は黒澤ダイヤさん。

昔、受験勉強などで世話になった頼れるお姉さんみたいな存在の人だ。

ダイヤ「転入する生徒って夜空さんのことでしたのね」

夜空「びつくりしました？」

ダイヤ「それはそうでしょう。鞠莉さんから男子生徒が転入してくるしか聞いていませんでしたので」

現在、俺はダイヤさんに連れられ、生徒会室に向かっている。
しかしダイヤさん、昔よりスラツとしてなんていうか……。

夜空「綺麗……」

ダイヤ「えっ？」

夜空「はっ……！」

ヤバイ……。声に出してしまった……。

ダイヤ「／／／／」

ダイヤさん顔真っ赤にしてホク口掻いているよ……。

ダイヤ「はっ……はい！生徒会室に着きましたよ」

なんやかんやで生徒会室に到着。

ダイヤ「はい、これで手続きは以上になります。明日から貴方は本校の生徒です。くれぐれも本校の名を汚さない様によりしくお願いしますね」

夜空「ありがとうございます」

手続きが終わり、俺は帰ろうとする。

ダイヤ「あつ、夜空さん」

突然ダイヤさんが呼び止める。

ダイヤ「その……浦の星に入ってくれたのは良いのですが……夜空さん、貴方野球はどうするのですか？」

やっぱり聞いてきたか……。

夜空「いいんです。俺、しばらく野球から離れようと思っ
ていますので」

ダイヤ「でも、あんなに頑張って努力して東京の強豪に
入れたのに……」

夜空「失礼します。さようなら」

ダイヤ「夜空さん！」

ダイヤさんは再び呼び止めるが俺は生徒会室を退室した。

夜空「……………」

バスが走る中、俺は先程のことを思い出していた。

ダイヤさんの言葉。

“夜空さん貴方野球はどうするのですか？”

加美奈姉の言葉。

“浦女に入れば野球どころか甲子園にも行けないのよ？”

夜空「くそっ……。どいつもこいつも野球野球って……。俺は今、怖くて投げられないのに……」

窓を眺め、歯を食い縛りながら俺はバスに揺れ、家へと帰っていったのだった。

第4話

夜空「はあはあはあ……」

果南「やった！私の勝ちだね！」

浦の星の手続きを終えた翌日、俺はいつものように果南姉と朝練をしていた。

果南「どうしたの夜空。内浦離れている間体力落ちたんじゃないの？」

高らかに笑う果南姉。

返す言葉もないや……。

果南「あつ、そうそう。ダイヤから聞いたよ。浦女入るんだって？」

夜空「情報が回るの早いよ……」

果南「じゃあ！また夜空と毎日一緒に登校できるね！中学の時みたいに！」

ずいっと俺に顔を近づけてきた果南姉。

近い近い……。

夜空「う……うんそうだね。でも今日は登校初日で1時間目の時間くらいの登校になっっているから一緒に登校できるのは明日からかな」

果南「わかった。じゃあ明日いつものバス停でね！」

夜空「了解」

果南「ようし！じゃあ帰りは競争して帰ろうか！」

夜空「望むところ……！」

こうして俺は明日から毎日果南姉と登校するようになった。
ちなみに帰りの競争は見事果南姉に負けたとき。

夜空「うん……。準備完了」

朝練から戻った俺は浦女の男子用の制服に着替えた。
また……。学校に通えるんだな。

夜空「行つてきます」

加美奈「行つてらっしゃい」

孝蔵「気をつけてな」

加美奈姉、じいちゃんに見送られ俺は浦女へと向かっていった。

バス亭まで歩き待つこと数分、浦女行きのバスがやってきた。

バスに乗り、窓側の席に座る。

座ったと同時にバスのドアが閉まり、進みだした。

俺は乗っているこの時間、イヤホンを耳に付け音楽を聴き始めた。

関係ない話だと思いが俺は試合前には必ず音楽を聴くようにしている。

なぜかという、試合への入りが一番肝心だからだ。

音楽を聴いて高まった気持ちで試合に入る。それが俺のルーティンである。

次は浦の星女学院前、浦の星女学院前。

おっ、どうやら到着したようだな。

俺は降車ボタンを押した。

浦女に到着し、校舎内に入ったのはいいが……。

夜空「職員室……どこ……？」

職員室の場所がわからない……。俺が困っていたその時だった。

ダイヤ「夜空さん！」

夜空「ダイヤさん……」

やった……助かった。

ダイヤ「こんなところで何しているのですか!？」

夜空「えつと……。実は職員室がわからなくて……」

ダイヤ「それでしたら私が案内致しますわ」

夜空「助かります……」

ダイヤさんはマジ女神です……。

頼れるお姉さんです。

俺はダイヤさんに職員室を案内してもらった。

ダイヤ「ここですわ」

夜空「ありがとうございます」

ダイヤ「いえいえ。では私は教室に戻らないとなりませんので」

俺に案内した後、ダイヤさんは自分のクラスに向かっていった。

「失礼します」

俺は扉を開け、中へ。

すると1人の先生が俺の前へやってきた。

「君が例の共学テスト生？」

夜空「はい。望月夜空です。今日からよろしくお願いします」

佐藤「よろしく。私は君の担任になる佐藤だ。さっそく君を教室まで案内しよう」

俺は佐藤先生に連れ、教室へ向かっていった。

どんな人達がいるんだろ……。

あ……クラス女子ばかりつての忘れてたよ……。

佐藤「望月君つて、東京の強豪にいたあの望月君でしょ」

夜空「!!」

教室に向かっていると佐藤先生が話しかけてきた。

なんで俺が東京の強豪にいたことを……。

佐藤「私、野球が好きでね。特に高校野球はいろんな試合を見に行ったりしていたの。いろいろな試合を見ていたその時、目に移ったのは夏の都大会で投げていた望月君、君だった」

夜空「……………」

佐藤「あんなに150km/hオーバーのボールをバンバン投げられる投手なんて他にもいないわ。でも終盤でプレッシャーに圧され、相手に頭部への死球は君にとって大ダメージ、それで交代せざるをなかった」

やめろ……。

佐藤「そして新チーム始動した時、君は調子が上がらず自分が思ったプレーが出来なくなってしまう」

この人どこまで俺を見ていたんだ……。

佐藤「望月君……。この際はつきり言わせてもらおうわ」

“君はイツプスという病に架かってしまったのよ”

佐藤 「じゃあ、合図したら入ってきてね」

夜空 「はい……」

佐藤先生が教室へ入っていく。

夜空 「イツプス……」

先程先生に言われたことが頭から離れない。

俺がイツプス……。

佐藤 「実は今日皆に重大なお知らせがあります」

あ、佐藤先生の合図そろそろだな。

佐藤 「このクラスに……共学テスト生として男子生徒が入ります！」

先生から告げると教室からはというと。

“キヤー!!”

夜空「!？」

えっ……。

なにこの黄色い声援……。

そんなに盛り上がる物なのか……？

逆に不安なんですけど……

「先生、その人イケメンですか!？」

「やった！他のクラスに自慢できる！」

やめて……やめて……。

これ以上あまり期待しないで……。

入るのが辛くなってくるからマジ……。

佐藤「それじゃあ入ってきて！」

先生から合図が来たので入ることに。

一呼吸置いて教室へ入り黒板前まで歩いた。

夜空が教室に入ってくるその前。

曜「千歌ちゃん、梨子ちゃん」

千歌「曜ちゃんどうしたの？」

梨子「朝から慌ただしいわよ」

曜「知ってる？今日このクラスに男子生徒が転入してくるって」

梨子「それって誰情報？」

曜「風の噂ってやつであります」

千歌「そうなんだ。どんな人なんだろ。そうだ！いつそAqoursのマナージャーやってもらおうかな！」

曜「千歌ちゃん……気が早すぎ……」

梨子「ほら、先生来たわよ。席に着きましよ」

千歌、曜、梨子は先生が入って来たので席に着く。

千歌「えっ……?」

曜「嘘……?」

梨子「なんで……まさか……」

夜空「初めまして、望月夜空と言います。自分東京の学校から来ましたが出身は内浦です。これから皆さんと仲良く学校生活を送りたいと思っています。よろしくお願

します」

千歌、曜、梨子「夜（夜空）くん!？」

夜空「えっ……?」

声が出た方を見てみると。

夜空「千歌、曜……、えっ……梨子も!？」

幼なじみの千歌と曜、東京の時、近所だった同級生の桜内梨子だった。

俺これからどうなるのかな……。

第5話

「千歌……曜……。そして梨子!？」

千歌と曜はわかるけど……。なんで梨子も……。

佐藤「ん？なにになに知り合いなの？じゃあ望月君は桜内さんの隣空いてるからその席に座って」

先生に言われた通り俺は梨子の隣の席に向かう。

梨子「……………」

夜空「……………」

正直HRが終わるまで梨子と顔合わせることができなかった。

気まずくて顔合わせることなんて出来るわけないよ。

佐藤 「はい、これでHRを終わります。皆、望月君にいろんなこと教えてあげてね」

佐藤先生は教室を出ていった。

その同時にクラスの人達が俺の席に集まってきた。

「ねえ！望月くんって東京いたんでしょ？東京ってどんなところ!？」

「望月くんって身長高いね！何かスポーツやってたの？」

「好きな食べ物？」

質問攻めに合っている俺。

でも自分から聞きにいけないから正直助かる。

しかし元気だなこのクラスのメンバーは。

千歌「しかし驚いたよ、まさか夜くんが転入してくるなんて」

曜「そうだね。でももつと驚いたのは梨子ちゃんが夜くんと知り合いなことだよ」

梨子「東京にいた時、近所に夜空くんが引越してきて……。でもこうしてまた一緒に……」

小さくガッツポーズする梨子。

千歌「……だよ」

曜「え？」

千歌「奇跡だよ!!」

俺が質問を返している時、千歌が俺の席にきた

夜空「どうしたの千歌」

千歌「夜くん! A q o u r s のマネージャーやりませんか!」

夜空「……………。へ?」

千歌が手を伸ばしてお願いしてきた。

A q o u r s ? マネージャー? なんのこと?

俺が困惑していると曜と梨子が俺の席に来た。

梨子「もう千歌ちゃん、夜空くんが困っているでしょ?」

曜「そうだよ千歌ちゃん、説明もしてないのにいきなり過ぎるよ。ごめんね夜くん」

夜空「いや、いいよ。気にしないで」

千歌「こんな感じなのは昔から変わってないのは知ってるし。」

曜「そういえば千歌ちゃん、この後先生に呼ばれているんじゃないかなかったっけ」

千歌「ああ！忘れてた！」

夜空「何したの？」

千歌「数学の課題提出しないとイケないんだっ！早く出しに行かないと補習になっちゃう！曜ちゃん行こう！」

曜「はいはい。じゃあ夜くんまた後でね！」

千歌「夜くん！マネージャーのこと考えておいてねー！」

千歌と曜は教室を出ていった。

もしかしたら千歌と曜は俺と梨子の再会の為に時間を作ってくれたのかもしれない。

いや、それはないか。

まずは千歌の課題提出に感謝しよう（意味不）。

夜空「久しぶりだね、梨子」

梨子「うん。本当に久しぶり」

夜空「まさか転入先で再会出来るとは思わなかったよ」

梨子「私も……。なんだか……。運命感じちゃうな」

フツツと笑う梨子。

ちよつとドキツとした。

夜空「後、あの時……ごめんな、せっかく観に来てくれたのに……勝てなくて」

梨子「そんなことない！夜空くんはよく頑張ったよ！だから気にしないで！」

東京にいた時、梨子は俺の試合を良く観に来てくれた。

しかし俺はあの時の試合を観に来てくれた梨子に見せてしまった。
でも梨子はそのことを気にしていなかった。

やっぱり……優しいな。

夜空「そうだ梨子、さつき千歌がA q o u r s と言ってたけど……何か知ってる？」

梨子「うん。私ねスクールアイドルをやっているの。他にも千歌ちゃんや曜ちゃん、1年生3人と3年生3人、計9人で活動しているんだ」

“スクールアイドル”。

聞いたことあるな。

確か……何年くらいか前に、s ってグループが伝説を起こしたかどうたらって

ニュースがあつたな

梨子「やつぱり……私みたいなのがアイドルなんて合わないよね。歌うのあまり得意じゃないし、中身こんな地味だし……」

夜空「そんなことはないと思うよ……。梨子良くピアノ弾きながら俺に歌ってくれたじゃないか」

そういうと俺は鞆から音楽プレーヤーを取り出す。

梨子「これ……」

夜空「梨子が引越す前にくれたピアノの音源。これいつも聴いていて凄くリラック
ス出来るんだ。だからもつと自信持っていていいんだよ。それと……梨子は……アイドル
やっても……可愛いから……」

梨子「！／／／／。あ……ありがと……。嬉しい／／／／」

俺何言ってんだよ……。
めっちゃ恥ずかしい……。

梨子「そうだ夜空くん、野球は今どんな感じ？」

夜空「えっ……？」

不意に質問に驚いた。

梨子「夜空くん……？」

夜空「あっ……野球？まあそこそこだよ」

アハハと誤魔化した。

梨子「……………」

久しぶりに夜空くんに会ったけど何だかいつも夜空くんじゃない。

いつもの夜空くんなら野球の話になると元気に話してくれるのに……。

もしかしたらあの時の出来事が原因なんじゃ……。

その時、私は聞き出す為にある行動に出た。

梨子「夜空くん、まだ学校内のこと知らないでしょ？私が案内してあげるわ」

夜空「そうか。じゃあよろしくお願いするよ」

梨子「任せて」

私が考えた方法とは校内を案内している最中に聞き出す方法。

何としてでも夜空くんの本音が聞きたい。

あの出来事の後、夜空くんの身に何があったのか
必ず聞き出してみせるわ。

夜空くん……。

私に教えて……。

あの時何があったの？

元氣のない夜空くんなんてらしくないよ……。

第6話

俺は梨子の提案により学校を案内してもらうことになった。

夜空「こうやって梨子と一緒に歩いたりするのって東京にいたとき以来だな」

梨子「そうね。私と夜空くんの学校とそんなに距離なかったもんね」

俺と梨子は東京にいた時の話をしながら校舎内を歩いている。

夜空「あつ……」

梨子「どうしたの？」

俺はある教室を見て止まる。

梨子「夜空くん、音楽室を見てどうかした？」

夜空「久しぶりに……梨子の生演奏……聴いてみたいな」

梨子「えっ？／＼／＼」

夜空「ダメ……かな」

梨子「う……ううん！そんなことないよ！ただ……上手く弾けるかわからないけど……」

夜空「良かった。じゃあ入ろう」

梨子「えっ……！ちよつと！夜空くん！」

俺と梨子は音楽室へ入って行った。

でも俺達は気づいていなかった。

「リリーが音楽室へ入っていったけど……隣にいた男は誰……？でもなんだか懐かしい波動を感じたような……」

後を誰かに見られていたことを。

夜空「ここが浦の星の音楽室……。風通し良くていいな」

梨子「音楽室っていうのはそういうところよ。夜空くん何聴きたい？出来れば私が弾けるのでお願いね」

夜空「うーん、そうだな」

悩みに悩む俺。

そうだ、東京にいたとき梨子はこの曲良く俺に弾いてくれていたじゃんか。

夜空「あとひとつ……」

梨子「えっ？」

夜空「東京にいた時、いつも弾いて歌っていてくれた『あとひとつ』って曲が聴きた
い」

梨子「……………」

夜空「梨子？」

梨子「フフッ。夜空くんなら絶対この曲だろうと思った。この曲本当に好きだったも
んね」

梨子はピアノの椅子に座り込み、鍵盤に手を添える。

梨子「それでは聴いてください。『あとひとつ』」

一呼吸置き、梨子の演奏が始まった。

♪

梨子のピアノと向き合っている姿を見ていると様になっていって本当と思う。東京にいた時よりも遥かに。そして芯のある歌声。梨子にはこういうのも隠し持っていたんだな。凄いや。

演奏と歌声を聴いているとなんだか今までの自分を思い出してくる。

野球を始めた頃の自分。中学で優勝した時の自分。高校で大会に負け、悔し涙を流した自分。

そして……。

投げるものが怖くなってしまった自分……。

演奏がクライマックスになってきた時、異変が起きる。

ポロツ……。

えっ……なんで……。

なんで涙が出てんだよ……。

なんで止まんないんだよ……。

涙が出て来てしまった俺。

すると演奏終えた梨子が駆け寄ってきた。

梨子「はい」

梨子はハンカチを渡す。

梨子「夜空くん……。泣いていいんだよ……。？あれから辛かったんだよね？野球やるの辛かったんだよね？」

泣きながら頷く俺。

梨子「だつたら今いっぱい泣いていいんだよ。そして全て泣き終わったら私に話して？大会が終わった後、何があったのか……。」

俺はうん……。うん……。って言いながらも泣いた。

自分が自分でなくなるくらい泣き乱れた。

そして泣いている人物がもう一人。

「ぐすつ……。ううつ……。まさかあの人が浦の星に転入してきたなんて……」

その人物は泣きながらそそくさと行ってしまった。

梨子「どう？落ち着いた？」

夜空「うん……。その……。ごめんな……。恥ずかしいところ見せて」

梨子「ううん、気にしないで」

夜空 「じゃあ、行こっ 「待って！」 え？」

梨子 「何行こうとしてるの？ 夜空くん」

夜空 「えっ……終わったから戻ろうかなって……」

梨子 「話はまだ終わってないわよ？」

夜空 「いやもう話なんてないでしょ……」

梨子 「泣き終わったら話してって私言ったわよ？」

夜空 「……！」

梨子 「夜空くん……何か悩んでいるんじゃないの？」

ぐいぐいと俺の胸のつつかえに迫ってくる梨子。

梨子「あの大会が終わった後……何かあったんでしょ？」

夜空「……………」

そこまで核心突かれてきてるのか。
じゃあもう隠すこともないな。

夜空「本当……梨子には参るよ……。わかった、話すよ。あの後、俺に何かあったのかを」

そして俺は梨子に全て話し、打ち明けた。
大会の後に起きた俺の異変全てを。

梨子「イツプス……」

夜空「佐藤先生はそう言っていたんだけど俺個人も正直わかっていないんだ」

梨子「テレビで見たことあるわ。アスリートにおけるスポーツ障害で思い通りの行動が出来なくなるって……。詳しくはわからないけど……」

夜空「あれから投げることができない状況になってしまっただけ……」

梨子「そうだったんだ……。ありがと、話してくれて」

夜空「いや、逆に話聞いてくれてありがとな」

梨子「いいえ。夜空くん、私になぜ“あとひとつ”を演奏だけではなく歌ったと思う？」

演奏だけではなく歌った理由か。
何かあったのかな。

梨子「歌詞にね、僕は信じているから、君も諦めないでいて” ったのがあるの。これを私から言いたかったんだ」

すると梨子が俺の手を握る。

梨子「私、信じているから。もう一度、夜空くんが野球やっている姿を見れることを。夜空くんのことずっとこれからも応援してるから……。だから……。野球やめるなんて言わないで！それだけ約束して！」

梨子は涙目にもなりながら俺に言ってきた。

野球やめるな……。か。

まだこんな俺にもチャンスがあるのかな……。

ならそれに賭けてみるか……。

梨子「ふえ……／＼／＼」

俺は梨子の涙をそつと拭き取った。

夜空「ありがとな梨子。お前のおかげで少しだけ勇気が出てきたよ。少しずつだけど前に進もうと思う」

梨子「良かった……。少しだけど夜空くんの表情変わって見えるよ」

夜空「そうか？つてか結構長居しちゃったな。そろそろ行こうか」

梨子「うん♪」

俺と梨子は音楽室を後にし、教室へと戻って行った。

戻ったと同時に俺らは千歌と曜に質問攻めにあっていた。

後日の話になるが俺の異変はA q o u r s 全員に知れ渡ることは遅くはない話だっ

た。

第7話

キンコンカンコーン。

夜空「んー」

俺の浦の星初登校がたった今、余鈴と共に終わりを迎えた。
俺は椅子に背をもたれ、身体を伸ばした。

梨子「夜空くん」

帰る支度をしていた時、梨子が声を掛けてきた。

梨子「千歌ちゃんから言われたことどうするの？」

夜空「え？」

梨子「ほら、Aqoursのマネージャーって話……」

夜空「ああ……。言っていたね」

いきなり言われて訳がわからなかったやつか。

夜空「うーん。俺、Aqoursのこと全く知らないからさ。すぐ答えは出せないよ」

梨子「じゃあ、明日練習あるからは是非見にきてみたらどう？何かわかるかもしれないわよ」

夜空「なるほど。じゃあ明日覗いて見ようかな」

千歌「ほんと!？」

夜空「うわ!!」

千歌が飛んで来た……。

千歌「本当に本当にほんと!?」

夜空「3回も言わなくていいよ……。本当だから」

曜「夜くん大丈夫なの？」

夜空「別に何もないから。覗いて見学してみるよ」

千歌「やったー!!夜くんが見に来るぞー!!」

千歌は喜んで飛び上がっている。

千歌はいつもテンションしてるな。

千歌「それじゃあ、また明日ね!待ってるから!」

夜空「うん。また明日」

千歌、曜、梨子は先に帰って行った。

さて、この残った時間どうしよかな。

そうだ、もう少し学校内見て回ろうかな。

梨子のピアノに時間持って行ってしまったから他の教室見れなかったし。

俺は荷物をまとめ、教室を後にした。

♪

夜空「ん？」

俺の携帯からメールの受信が。

差出人はダイヤさんだ。

『今時間ありますか？ありましたら理事長室に来て下さい』

ダイヤさんからの呼び出しのメール。

正直ゾクツとした。

俺なんか悪いことしたかな……。

とりあえず行ってみよう。

俺は理事長室に到着した。

途中に迷ってしまったのは許して。これでも頑張ってたどり着いたんだから。

夜空「よし………！」

扉をノックする。

「どろろ」

ダイヤさんの声……。

夜空「失礼します」

俺は理事長室に恐る恐る入る。

ダイヤ「夜空さんすいません。突然呼び出してしまつて」

夜空「いえ……。別に何もなかったの」

待っていたのはダイヤさんともう1人。

「チャオ！夜！」

夜空「鞠莉姉！」

小原鞠莉。昔世話になった俺の大事な姉貴分の人。
そして浦の星の理事長様でもある。

鞠莉「久しぶりデスネー！シャイニー！」

そう言つて抱き付いてくる鞠莉姉。

あの……柔らかいのが当たつてますよ姉さん……。

鞠莉「んー♪夜のこの身体付き。全然変わつてないわ」

このおっさんもうやだ……。

ダイヤ「鞠莉さん……。そろそろ本題に入ってください……」

鞠莉「Oh〜」

ダイヤさんが鞠莉姉を俺から引き離す。

助かった。ずっとこのままだったら理性持たずヤバかった。

ダイヤ「実はあなたを呼び出したのは他でもないのです」

夜空「どういうことですか？」

鞠莉「夜はちかちかからスクールアイドルのこと聞いたでしょ」

夜空「うん。確か、鞠莉姉やダイヤさん、後、果南姉もやっているんだよね」

ダイヤ「そこまで話が進んでいるのですね」

鞠莉「それとちかっちからマネージャーやってほしいってのも言われたでしょ？」

夜空「うん。言われたよ」

ダイヤ「問題はそこなのです」

マネージャーをやることに問題……。

どういうことだろうか。

鞠莉「マネージャーをやるのはいいけど、夜、あなた野球はどうするの？」

鞠莉姉からも野球って言葉が出てきた。

野球はどうするの……か。

もし俺がマネージャーをやり始めるたら野球とはもう……。

鞠莉「ねえ夜。私から提案があるの」

夜空「提案……？」

鞠莉「浦の星が今統廃合の話が進んでいるなか……だけどその統廃合する予定の学校で野球やってみたらどうかしら」

夜空「えっ？でも……」

鞠莉「大丈夫！小原家の力を使って話を付けてみるから！」

夜空「鞠莉姉……」

ダイヤ「これからの流れは授業は浦の星で受け、部活の方はそちらの学校で行うような感じになります。それと、あなたはそちらに行っても浦の星の生徒なんです。そのことは忘れないでくださいね」

鞠莉「私ね、夜にはA q o u r sのマネージャーより野球をやってほしいの。大会で負け、悔しい思いして野球やめるよりもおもいつきりやって、おもいつきりやりきって

終わってほしいから」

夜空「ありがとう、ダイヤさん、鞠莉姉」

もう一度野球ができる……ってのはいいのだが今の俺に何ができるのだろうか。

また去年みたいに走って終わりなのだろうか。

なにかきっかけをほしい。

そう考えながら俺は理事長室を後にした。

第8話

理事長室を後にした俺は再び学校内を歩き始める。

鞠莉姉やダイヤさんの話だと、浦の星と統廃合予定の沼津の私立校で野球が出来る。ただし、浦の星の生徒なのは変わりないから節度を持って野球に専念してほしい……か。

正直、また野球が出来るのは嬉しい……が、俺には1個悩ましいことがある。それはピッチャーが現時点で難しいことだ。

去年の夏に無様な結果を残し、秋には調子を崩し、挙げ句の果てに大会の構造から外されてしまった。

じゃあ、今の俺には何が出来るのか。

そんな感じで歩きながら思っていると俺はある教室を目にする。

夜空「図書室か……」

図書室にある本なら何かきっかけとなる材料になるんじゃないかな。

しかし図書室か。本と言えば……。

“ずらあゝゝ☆”

夜空「ふふっ……」

本って言葉を思うとあの子を思い出すな。

昔、俺の家で涼みながら本を読み合っていたっけ。

本当懐かしいな。

図書室に入ると静かな雰囲気を保つように窓のカーテンが靡き、風が透き通ってい

る。

夜空「誰も……いないのかな」

下校時間も過ぎているからもしかしたら誰もいないのじゃ……とそう思ったその時だった。

「んー。んー」

夜空「ん？」

どこからか声がした。

俺は声のしたところへと歩いていく。

「んー、取れないぞら……」

俺が今見ているのは女の子が頑張って本棚の上の方から本を取り出そうとしている

ところ。

つてか無理あるよ……。女の子が高い所の本を取るのは……。おつと……。これ禁句だったかな……。

取り敢えず大変そうだから助けてあげるか。

夜空「よつと」

「えっ?」

夜空「はい。これを取りたかったんでしょ?」

「あつ……。ありがとうございます」

女の子はお礼を言う。

しかしこの子どこかで見たとような……。茶色い長い髪で本好き……。まさか。

「あの……。おらに何か……。ハッ!」

夜空「おら?」

「また言ってしまったぞら……。ハアア!!また……」

その子は本で顔を隠し、踞ってしまった。
俺は確かに聞き逃さなかった。

おらにずらって言葉は間違いなく……!

夜空「マルちゃん?」

「ふえっ?」

夜空「マルちゃんだよね?その口癖」

「……………」

夜空 「本当に久しぶりだね。昔、覚えてる？俺の家で本読み合いっこしたっけ」

「その事……。もしかして……。あなたは……」

女の子は泣き目になりながらプルプル震えだす。

夜空 「久しぶりだね。花丸ちゃん」

花丸 「夜空兄ー!!」

マルちゃん基、国木田花丸ちゃんは嬉しさのあまり、俺の方へ飛び付いてきた。

花丸 「本当に夜空兄ずら!？」

夜空「そうだよ」

花丸「あの時、引越したって聞いた時は本当に寂しかったぞら……」

夜空「俺もあの時言えなかったから……。でもこうしてまたマルちゃんとまた会えた」

花丸「ずら！ そうだ、夜空兄がいない間、マルが夜空兄へのおすすめの本を見つけたんだ」

夜空「おっ？ そりゃ楽しみだ」

花丸「待っててね。すぐ取ってくるぞら！」

マルちゃんは本を取りに行ってしまった。
すると。

“ピギイイイ!! ドンガラガツシャーン!!”

夜空「なっ……なんだなんだ!?”

悲鳴と何か落ちた音が!

行ってみるとそこには本に埋まれている女の子が。

俺は手を伸ばしているのを見つけ、ゆっくりと引つ張り、救出した。

ルビイ「あっ……ありがとうございます……!?”

夜空「最悪、大きな怪我なくて良かったよ」

俺が助けたのは黒澤ルビイちゃん。

ダイヤさんの妹で小さい頃、家が近かったからよく遊んでいた。極度の人見知りで男性も苦手つてのは聞いてるが……どうやら俺はルビイちゃんの兄つてことで心を開いているらしい。あつ、これ黒澤家叔父さんから聞いたことだから誰にも言わないでね。

夜空「ルビイちゃんはなぜ本の下敷きに？」

ルビイ「実はルビイ……上の方にある本を取りたくて……踏み台使つてなんとか取れたのですが……バランス崩しちゃつて……」

夜空「それで本と一緒に崩れていったつて訳ね」

ルビイ「ちゃんはこくりと頷く。

ん？あれは……」。

夜空「ルビイちゃん膝見せて」

ルビィ「ピギ!？」

夜空「やっぱり」

ルビィちゃんの膝が気になった為、見てみると擦り向いていた。

夜空「これでよし、と」

俺は鞆から絆創膏を取り出し、ルビィちゃんの膝に貼った。

夜空「取り敢えず、消毒はしてないから帰ったら必ず消毒すること。後、はいこれ。替えの絆創膏。消毒したらこれ貼ってね」

ルビィ「ありがとう夜空お兄ちゃん！」

花丸「夜空兄お待たせずらあゝ」

ルビイちゃんの手当てが終わると同時にマルちゃんが本を2冊持ってきて戻ってきた。

その2冊が俺の野球人生を大きく変わる起爆剤になろうとは思わなかった。

第9話

夜空「週刊ベースボールに野球の心理学か……」

花丸「どれも夜空兄にピッタリの本ずら♪」

週刊ベースボールはまだしも野球の心理学って……。

ちよつとグサツとするな、イップスがバレたみたいで。

夜空「ありがとう、マルちゃん。帰って読むことにするよ」

俺は受け取った本を鞆にしまう。

すると図書室の扉が開いた。

ダイヤ「ルビィ、花丸さん。お待たせしました」

ルビィ「あつ、お姉ちゃん！」

入ってきたのは生徒会の仕事を終えたダイヤさん。

ルビィちゃんもダイヤさんに抱きついた。

尊いね、やっぱ姉妹って。

ダイヤ「あら？夜空さんもいたのですか？」

夜空「はい、考え事しながら歩いていたらいつの間にか図書室に……」

俺はあははと頭を掻きながら苦笑いした。

それを見たダイヤさんは俺に微笑みを返した。

ダイヤ「でしたらこれから私達と一緒に帰りませんか？バスの時間も迫ってきていますので」

夜空「そうかもうそんな時間か。じゃあ俺も一緒に帰ろうかな」

花丸「本当ずら!？」

マルちゃんが俺の懐に飛び付いてきた。

花丸「また夜空兄と一緒に帰れるずらく」

確かに昔はマルちゃんとよく帰っていたっけ……。
手を繋いで……。

夜空「っ……／＼／＼」

昔のこと思い出したらなんだか恥ずかしくなってきた……。
今絶対俺の顔赤いよな。
バレたらまず……。

ダイヤ「夜空さん……何か今変なことを……」

夜空「はへっ？そんなことないっすよ!？」

ルビィ「？」

危ない危ない変な声出てしまった。

ダイヤさんにはバレる一步手前だったみたいの様だ……。

ルビィちゃんには意味がわかってしまったら発狂して倒れそう……。

花丸「それじゃあ、帰ろう♪」

そういうとマルちゃんは俺の左手を握ってきた。

夜空「マルちゃん」

花丸「なあに？」

夜空「なぜ俺の……手を握っているの？」

花丸「昔みたいにまた手を繋いで帰りたいすら！」

夜空「えつとね……マルちゃん。俺ももう高校生で昔の様にやるのはちよつと恥ずかしいって言うか……」

花丸「ダメ……すら……？」

夜空「ぐっ……」

マルちゃんからの上目遣い＋涙目の攻撃。

これは……もう……。

夜空「……今日……だけね」

花丸「ずらく♡」

はい、負けました。

無理です、勝てません。

黒澤姉妹には呆れた目（ダイヤさんだけ）で見られてますがこれは仕方ないことです。それから俺達はバスに乗り、それぞれの家路へと帰って行った。俺の隣は手を繋ぎっぱで居眠りしてるマルちゃん。

ルビィ「（ルビィも夜空お兄ちゃんと手を繋ぎたかったな……）」

ダイヤ「ルビィ? どうしました?」

ルビィ「ピツ!? な……なんでもない!」

ダイヤ「?」

夜空「ただいま」

加美奈「おかえり」

俺が家に着くと加美奈姉が出迎えてくれた。

加美奈「どうだった？初めての浦女！」

夜空「うーん……いろいろ疲れたよ」

加美奈「そっかそっか。ご飯出来るまで時間あるから部屋でゆっくりしてたら？」

夜空「そうするよ」

俺はよいしょと鞆の肩掛けを直し、自分部屋へと階段を上って行った。

夜空「あー疲れた」

部屋に入った俺は鞆を床に置いてベッドにダイブした。
登校初日ってこんなに疲れるものなのかな……。

夜空「そいえば……マルちゃんから受け取った本があるんだっけ」

ベッドから起き上がり、鞆から本を取り出し、机に座る。
まずは……野球の心理学から。

夜空「……………」

一通り読んでいると俺は1つのページを目にする。それは朝に先生から言われたのと同じ単語だった。

夜空「イツプス……」

イツプスとは心因性の病気の事でいつも行っている動作が突然できなくなってしまう症状のこと。

イツプスの原因は現在多数挙げられているが、一番影響が大きいのは心的外傷、トラウマと呼ばれる脳に残る過去の悪い記憶。

つまり俺の場合は高1の夏大決勝での相手への死球の記憶が残ってしまい、コントラールミスや悪送球など症状として出てしまうということになる。

だから秋の時に調子出なかったのか……。
そういうと克服するにはどうしたらいいのか、考える事は1つ……。

夜空「コンバート……」

ピッチャーから野手へのコンバート。

この本には例えとしてそう書かれている。

野手へのコンバートはピッチャー一筋だった俺にとって全く想像が浮かかない。

気分変えて週刊ベースボールでも読むか……。

夜空「おつ！巨人首位奪還したじゃん！最近好調だな〜」

俺が好きなプロ野球球団は読売ジャイアンツ。

エースの菅野智之のピッチングに惚れてしまい、巨人ファンになったんだよな。

見ていると菅野の一面と他球団の情報等々、週刊ベースボール本当に優秀。

読んでいると選手特集に目移る。

夜空「何だよこの選手……巨人にいたか……？」

俺が見たのは前の年に巨人にドラフト1位で入った選手、桑畑健人選手だ。

桑畑選手は高校時代、甲子園を完全試合で制覇し、ドラフトもパ・リーグ合わせ9球団からの競合の結果、巨人に入り、19歳にして、プロ野球史上初の1試合でサイクル

ヒットとノーヒットノーランの同時達成を樹立。そしてその年の日本一に貢献した。そして来年に行われるWBCに菅野、小林、坂本と共に出場となっている。

夜空「アンダースローでMAX145km/h!? しかも打率、本塁打、打点、現在12球団トップ!? 投手で三冠なんて見たことも聞いたこともないぞ!」

俺はこんな選手がいたことにびっくりしている。

待てよ……この人は投手の他にもバッターとしても活躍している。

桑畑選手みたいに投手も出来て、打撃も出来る選手になれば……。

夜空「これだ!!」

俺は部屋を飛び出す。

夜空「バッティングセンター行ってくる!!」

加美奈「ちよっ!? 夜空!」

着いた……。

俺が向かったのは内浦にある唯一のバッティングセンター。

良くここでストライクアウトやバッティングの練習していたっけ。

「もー！何で当たらないのよ!!」

中に入ると先客が。

「この！なかなかやるわね！だったらこのヨハネが闇の魔力を解放して……」

訳わからんこと言いながらバッテリーボックスに立つ。
しかし。

「どりゃあー！」

スカツ……。

「むー!!何でよー!!」

闇の魔力って何だったんだよ……。

ボールに掠りもしないじゃんか。

ん?待った……。

ヨハネ……闇の魔力……ってことは……。

夜空「善子……?」

善子「ヨーハーネー!!!」

ヨハネ基、津島善子の声がバッテリーングセンター内に響いた。

第10話

夜空「んで……善子は何でここにいるんだ？」

善子「ヨハネよ！ってムーンはいつからいたの!？」

夜空「質問を質問で返さない。そうだな、闇の魔力を解放つてここから」

善子「!!／／／／」

先程のバッティングを俺に見られ、顔を赤くしポカポカ叩いてくる善子。
うん、全然痛くない。

自称墮天使の力ってそんなもんなのか。

夜空「んで俺の質問の答えは？」

善子「クツクツク……。ヨハネに悪魔の囁きが聞こえたの。地獄に帰れなかったこのヨハネに光に満ち溢れた球を暗黒の金棒で打ち返せと……」

夜空「つまり帰りのバスに乗り遅れたって訳ね」

善子「うん……」

本当のことを言われ、しゅんとする善子。
相変わらず運の悪い奴だな。

昔と全然変わらん。

夜空「さてとじゃあ、帰りのバスに乗り遅れた可哀想な墮天使にバスの時間まで俺が付き合っただけか」

善子「ちよっ!?頭を掴むなー!!」

善子の団子頭を掴んだ後、140km/hのコースの中へ入る。

ちなみにここのバッティングセンターのMAXは140km/hだ。結構社会野球の人達が来てやっているのを見たりしていたな。

俺はバットを手に取り、200円を投入する。

夜空「ふう……」

マシンから放たれるまでの数秒、俺はバットを片手に持ち前後に揺らし、両手でバットを持ち左肩に乗せ身体を反らす。

これが俺のリラックスして打席に立つ方法だ。こうすれば余計な力なく集中出来る。

夜空「ふっ……!!」

カーン!

放たれた球はバットの音を響かせ、マシンの上段へ。

よし、次!

夜空「つつ……しょ！」

カーン！

夜空「かぁー！あれはショートライナーだな」

次放たれた球を流し方向に打ち返す。

良い当たりだがあれは試合だとショートライナーだと俺は思った。

夜空「まだまだ！どんどん来い！」

善子「……………」

ムーンが打っている姿を見てみると昔の頃を思い出す。

中学の時、私は墮天使が好きだってことを他の人達に馬鹿にされていた。

だけどムーンは……いや……夜空先輩は違った。

私が墮天使が好きってことを馬鹿にはせず、凄いつか褒めて返してくれた。

最初、この人何言っているんだろうとかそれは思ったわよ。でも、夜空先輩はこの後にこう言った。

“好きなことに夢中になれることって本当に凄いなと思うよ。俺だって野球好きでやっているし馬鹿にされても何クソ！って思っただけ練習しているよ。だから善子、好きなことを諦めちゃ絶対ダメだ。これだけは約束してくれ。な？”

私は嬉しかった。

まさかこんな様に私を思ってくれる人がいるなんてと。

そして私は夜空先輩にヨハネのリトルデーモンの称号を与え、呼び方をムーンと改名！

望月だからムーン！えっ？ルナ？ルナって女子っぽい呼び方だから却下！

高校生になってからいなくなっちゃったのは正直寂しかったけどまたこうして会

えたり、遊んだりできるなんて……！ヨハネ……感激……！

！
いつかヨハネの魅力に惚れさせ……ヨハネしか見えない様にさせてあげるんだから

覚悟しときなさい！リトルデーモンムーン！

夜空「ハクシヨン！んっ？なんだ!？」

ある程度打ち終わった俺は自販機の前へ来た。

夜空「善子何飲む？」

善子「ヨハネよ！クツクツク……。私は悪魔が唸りを上げて作った特性の……」おし
るこでいーな？」やめて!!」

冗談はさておき、俺は麦茶を買い、善子にはポカリを買ってあげた。
ちなみにおしるこは売っていない。ちよつとしたイタズラさ♪

夜空「さて飲み終わったら帰るぞ。善子そろそろバスの時間だろ？バス亭まで見送ってやるよ」

善子「ありがと……」

俺は飲み終えた麦茶のペットボトルを捨て、入り口の方へ。

善子「待って！」

善子が引き止める。

善子「最後に……あれ、やらない？」

善子が指差したのは……。

夜空「ストラックアウト……」

善子「打つのは出来なかったけど投げることなら！」

♪プレイボール！

音声で番号が示されボールが善子の方に渡される。

善子「堕天流奥義！暗黒魔導砲！」

どうせノーコンなんだろうなと思っていたら。

“ストライイク!”

夜空「うそーん……」

善子「あ……当たった……」

その後、善子はパネル6枚倒し、ダブルビンゴ達成。
こいつ……打てやしないのに投げるのは得意なのかよ。

善子「次はムーンの番よ!」

………!

夜空「えっ……俺も投げ……」「ほら!早くしなさい!」ちよっ……」

善子に押され、ゲージの中に入る。

不味いことになった……。

しようがないから仕方なくやることに。

“プレイヤー!”

先程と同じように表示され、ボールが渡される。

その時、異変が起きる。

夜空「……………」

あれ……………?

身体が…………腕が…………動かない…………。何で……………?

相手はただの9マスの的だぞ。

なのに何で投げられないんだ…………。バッターもいないのに何で…………。

あ…………あ…………あ…………。

バッター…………いるじゃん…………。

怖い…………怖い…………怖い…………。

善子「ちよつと！ムーン!?どうしたのよ！」

気になった善子がゲージの中へ。

するとその時だった。

“バタツ……”

善子「えっ……?ムーン!?ちよつと!!しっかりして!!」

夜空は頭の中でパニックになってしまい、突然倒れてしまった。

第11話

善子「ムーン！ムーン！しっかりして！ねえってば！」

善子がいくら夜空に呼び掛けても夜空は気を失っていて返事ができない。

そうだ……係員に……！

そう思った善子は係員のところへ。

善子「いない……」

善子が係員のいるところに行ったら“ただいま、清掃中”と言う貼り紙が。

善子「もー！どうしてこうタイミング悪いのよー!!」

善子が大声出しても夜空は気が付かない。

一体どうすればいいの……。

善子が涙目になりながらも悩み込む。

善子「こうなったら……」

善子はスマホを取り出し、電話帳を開きある人に電話を掛ける。

善子「お願い！出て！」

ふう……。

今日はこんな感じかな。

梨子は作曲に一息付く。
すると。

く
♪

梨子「ん？誰かしら」

梨子のスマホから着信音が。

梨子「もしもし？」

善子《りりー！！大変なの！！》

梨子「善子ちゃん？」

電話の相手は善子。

先程善子が電話を掛けた相手は梨子だったのだ。

善子《ヨハネ！って今はそれどころじゃない！》

梨子「何一人で騒いでいるの？悪戯なら切るわよ？」

善子《ちがつ……違うの！お願い聞いて！》

梨子「もう……。何があつたの？」

善子《ムーンが……！ムーンが！！》

梨子「ムーン？何のキャラなの？」

どうせゲームか謎の儀式のやり過ぎか何かでしょ。

そう思う梨子。

しかし、次に善子から話す言葉が梨子の表情を変えることに。

善子《夜空先輩が……ぐすつ……》

夜空……？

今善子ちゃん……夜空って言ったよね……？

梨子「善子ちゃん!!今近くに夜空くんいるの!？」

善子《うん……》

梨子「今どこにいるの!？」

善子《内浦にあるバッテリーセンターの中に……。ストラックアウトをやって帰ろうとする前に……。先輩の投げるところ見たくて……。そしたら……。先輩がいきなり倒れて……。私……。どうしたら……。》

梨子「善子ちゃん絶対にそこから動かないで!すぐに向かうから!」

善子との通話を終えた後、梨子は千歌の実家、十千万に行き、千歌の姉、美渡の力を借り、車でバッテリーセンターへ向かい、夜空を保護した。

保護された夜空は十千万へ運ばれた。

善子は美渡の車で家まで送られて行った。

十千万に運ばれて数時間。

夜空の家に連絡を終えた梨子は夜空が寝ている部屋に入る。

梨子「……………」

千歌「梨子ちゃん」

千歌が入ってくる。

千歌「加美奈さん何だって？」

梨子「夜空くんのことよろしくねって」

千歌「そっか」

千歌は梨子の隣に座る。

梨子「夜空くん……イッブスなの」

千歌「えっ……?」

梨子の発言に千歌は驚く。

梨子「東京の夏大決勝戦で相手にボールをぶつけてしまって、その怖さが頭にまだ残っていて、恐怖で投げることができないの」

だから曜ちゃんがキャッチボールしよって言った時に表情が……。

梨子「私ね、野球やっている夜空くんがとても輝いて見えた。その姿が私に勇気を与えてくれた。だから今度は私が……また夜空くんが選手として輝けるように……私が……夜空くんの支えになる」

梨子ちゃんは本気だ。

なのに千歌はあの時A q o u r sのマネージャーやってなんて……。私……バカ千歌だ。

梨子「もうこんな時間。帰らなきや」

千歌「泊まっていけば？」

梨子「ううん。大丈夫よ」

梨子は立ち上がる。

梨子「千歌ちゃん、夜空くんのこと任せていい？」

千歌「わかった。任せて」

梨子「よろしくね。じゃあ、また明日」

千歌「うん、また明日」

梨子は家に帰って行った。

千歌「……………」

今、部屋には千歌と寝ている夜空のみ。

千歌「夜くん、覚えてる？小さい頃、私とキャッチボールしたこと。私は覚えてるよ、最初ボール投げた時、私、投げ方下手でいろんなところに投げてボール探すの大変だったよね。そして探すのに時間掛かって美渡姉達に怒られたよね。えへへ……懐かしいな……。夜くん、投げられるようになったらまた千歌とキャッチボールしてくれる？も

ちろん曜ちゃんも……そしてA q o u r sの皆とも」

ふああと千歌は欠伸をした。

千歌「何か話したら眠くなっちゃった。おやすみ、夜くん」

そう言い、千歌は自分の部屋へと戻って行った。

夜空「ん……」

朝日が昇る前の朝方、夜空は気が付き目を覚ました。

あれ……俺は……何を……しかもここ……どこ？

悩む夜空。

すると夜空の頭に記憶が横切る。

夜空「そうか……。俺は……。投げようとして投げられず……。気を失ってしまったのか
……」

善子に迷惑かけてしまったな。

夜空は立ち上がり、部屋を出た。

そうか……。ここは千歌の家か。

歩きながら千歌の家だと知った夜空は外へ出る。

「ワン！」

夜空「……………」

夜空に近づいてきたのは千歌の家で飼っている犬“しいたけ”だった。

夜空「しいたけ……………」

しいたけ「ワウ？」

夜空「お前は……投げられない俺をどう思う？」

しいたけ「クウーン」

夜空「そうだよな……犬のお前が解るわけないよな」

しいたけをわしやわしやと撫でる。

するとしいたけは小屋へ歩き、中から何かくわえて戻ってきた。

夜空「お前……これ」

しいたけ「ワン！」

しいたけが持ってきたのはボロボロになった軟式のボール。

そこには夜空と名前が。

これは昔……俺がしいたけと遊んでいたボールだ……。

夜空「お前……これずっと持っていてくれたのか……」

しいたけ「ワン！」

これはしいたけなりの俺へのエールじゃ……。

夜空「……っ」

夜空は走った。

走った走った走った。

着いたのは海が広く輝いてる海岸。

夜空「俺の馬鹿野郎ー!!」

夜空は叫んだ。

夜空「投げられないからなんだ！怖いからなんだ！それでも俺の野球は終わってない！野手でもなんでもやってやる！精一杯足掻いてやる！そしてもう一度ピッチャーとして輝いてやる!!」

俺は広い海に大声で誓った。

梨子「やっと……素直に自分を出せたね」

夜空が振り向くと梨子が立っていた。

夜空「梨子……。俺は……。また迷惑かけてしまったな……」

梨子「本当よ。迷惑掛けすぎで本当に困っちゃうくらいよ」

夜空「ごめん……」

梨子「でも！」

梨子は夜空の前に。

梨子「迷惑かけた分、また野球頑張るってなら許してあげる♪」

夜空「ああ。もちろんだ」

すると暗かった空が明るくなってきた。

朝日が登ってきたのだ。

梨子「綺麗……」

夜空「そうだな」

まるで夜空の新しい歩みを祝うかの様に朝日が輝いていた。

俺も朝日みたいに輝けるかな。
そう思ったその時だった。

♪

梨子「夜空くんスマホ鳴ってるよ？」

夜空「本当だ」

スマホを取り出すと着信が。

画面には小原鞠莉と出ていた。

鞠莉《グツモーニング♪夜♪》

夜空「おはよう、鞠莉姉。どうしたの朝っぱらから」

鞠莉《統廃合先の高校から連絡きて了承を得たから夜にラブコールをくって♪》

遂に了承が出たか。

夜空「なんて高校なの？」

鞠莉《静真高校よ》

夜空「わかった。ありがとう鞠莉姉」

鞠莉《お・れ・いはく夜からのキスがいいな》

夜空「……………。イツツジョークでしょ？」

鞠莉《本気よ？》

話を聞いていた梨子が表情を変えて夜空を見ている。
怖い…………。

鞠莉《じゃあちゃんと伝えたわよく。頑張ってね♪》

通話が終了した。

また野球が出来る……。

だがその中思ったのは……。

静真高校ってどこなんだ……？

第12話

夜空「静真高校……。ここだな」

翌日、鞠莉から言われたように静真高校にやってきた夜空。中に入るとどこからか声が聞こえてくる。

夜空「向こうからだ」

夜空は声のする方へ向かった。

“サツコーイ！オーイ！”

夜空「やっているじゃん」

向かった先は静真高校のグラウンド。
そこには野球部が熱心に練習していた。

夜空「声……掛けに行くか」

グラウンドに一礼して入る。
すると。

「あのー！」

夜空「ん？」

グラウンドに入った夜空を見かけた茶髪でポニーテールの女の子が話しかけてきた。

「もしかして今日うちに来るって言う浦の星からの入部希望者って方ですか？」

夜空 「はい、そうですか」

「やっぱり！それじゃあ私に着いてきて来て下さい！」

夜空 「えっ？ちよつと……」

高松 「あ！まだ私前言ってませんでしたね！私は高松桜（タカマツサクラ）って言います！高校1年生でマネージャーやってます！」

夜空 「いや……そうじゃなくて……俺まだ心の準備が……」

高松 「それじゃ！行きましょう！」

夜空 「人の話を聞けえええ!!」

腕を捕まれた夜空。

ってかこの人……何気に力が強い！

話が全然聞いてもらえず、夜空はそのまま引っ張られて行った。

「……………」

「どうした？」

「何か走っているわ」

「何ってありや桜ちゃんじゃないか」

「後ろに誰かいる」

「あ？後ろだあ？本当だ」

「引っ張られてるね」

「監督の所に向かってますね」

「あれじゃないか？統廃合予定の浦の星から来る入部希望者つての」

「マジ？あいつが？」

その様子は練習中の部員達からの注目の的だった。

高松 「監督！入部希望の浦の星の生徒さんを連れてきました！」

「おっ、ぐ（苦笑）苦労様」

夜空「ハア……ハア……」

監督の元に強引に連れてこられた夜空は息切れを繰り返していた。

真島「さてと……初めまして。俺が静真野球部の顧問、真島だ。君の話は小原理事長から聞いている。このチームは過去に夏1回、春1回と甲子園に出場しているが今回の夏の大会は惜しくも準優勝で終わってしまったって甲子園を逃し3年生が引退、新チームが始動している。軽い自己紹介をこの後のミーティングで行うからすぐに着替えて俺の元に来てくれ、いいな」

夜空「はい！」

真島「高松、皆を集めてくれ」

高松「はい！」

夜空は部室に入り、練習着に着替えた。

真島「全員集合したな。皆は統廃合のことは知ってるな？知らないやつはいいな。実はその統廃合予定の学校から一人、新たに加わることになった。それじゃ、前に出て自己紹介をしてくれ」

夜空「浦の星女学院から来ました、望月夜空です。右投左打、ポジションはピッチャーですが今は訳ありで上手く投げることが出来ません。なのでしばらく打者の方を希望します。よろしくお願いします」

夜空の自己紹介が終わった後、拍手に包まれた。

真島「よし、練習再開だ。ノックの準備をしろ」

『はい！』

真島「次、望月！ファースト入ってみろ！」

おっ？俺の番か。

ここまで内野一巡としてノックを見ていたけどこのチームの守備は全体的に固いな。特にシヨートとセカンド。

まずセンター前に抜けるのはまず無いな。

おっと、俺の番だっけ。

俺は一塁を守っていた選手からミットを借りる。

夜空「よっしや！来い！」

真島がボールを握り準備する。

真島「行くぞ！」

鋭い打球が夜空の右へ飛ぶ。

素早く正面に移動し、捕球。

次は一塁線。

横飛びでミットに納める。

リズムよくボールを捕球していく。

イレギュラーやイージーな打球も何のその。

夜空のミットへ飛び込んでいった。

「へえ、やるじゃん。あいつ」

「なかなかセンスあるじゃん！面白え！」

セカンドとショートを守っていたチームメイトが夜空のプレーを見て歓喜していた。

真島 「ノックの次はバッティング！実戦を意識してやるように！」

『はい！』

真島 「次、望月！」

夜空 「はい！」

レギュラー陣がある程度打ち終わった後、最後に夜空が呼ばれた。
夜空は打席に入る。

「さて、バッティングの方は如何程かな」

チームメイトが見ているなか、ピッチャーが振りかぶって投げる。

夜空は充分にボールを引き付け、振り抜いた。

振り抜いた打球はライトの頭上を大きく越える。

2球目、3球目と夜空の打球は続けざまに外野を破った。

「ほお〜。飛ぶね〜」

「おいゴラァー！飛ばしすぎだー！」

外野のボール処理が忙しく大変のようだ。

練習が終わり、室内練習場の中ではチームメイトの自己紹介が始まっていた。

寺田「まずは2年からだな。俺はキャプテンの寺田守。ポジションはキャッチャーだ。わからないことがあれば何でも聞いてほしい」

胸をドンと叩く寺田。

倉本「次は俺！倉本和希だ！ポジションはショート！」

小宮「小宮涼真。ポジションはセカンド」

ニコツとする小宮。

何か怖い……。

伊藤「おう！俺は伊藤純だ！ポジションはセンター！てめえ練習手エ抜いたらブツ飛ばすからな！」

寺田「純は口悪いが本当はいいやつなんだ。あまり気にしないでくれ」

目付きと口悪いがアイドル好きの副キャプテン伊藤。

田島「次俺！俺は田島聡！ポジションはサードだ！楽しく行こうぜ！なっ！」

ハッハッハと背中をバシバシと叩いてくる。

テンション高いな……。

大槻「大槻拓海。ピッチャーだよ。よろしくね」

なんか不思議な雰囲気を感じるな。

赤田「赤田将吾。ポジションは拓と同じピッチャー」

高田「同じくピッチャー、高田健人。俺はサウスポーだ」

大槻「将ちゃんは頼れるもう一人のエース、健ちゃんは左バッターを得意とする左キ

ラーだから仲良くしてね」

大槻に言われた2人は照れていた。

俺は何も見えていないぞ……。男の照れ顔なんて。

茂木「茂木祐二郎だ。俺は主に代打として試合に出ている」

牧野「牧野忍。俺は代走、守備固めとして試合に貢献している。よろしくな」

村田「村田薫。マネージャーやっているわ。よろしく」

代打の茂木、代走、守備固めの牧野。

そして眼鏡をかけた黒髪ロングでナイスバディのインテリマネージャー村田薫。

2年生の紹介が終わり、次は1年生。

日向「日向咲也です！ポジションはレフトです！自分はレギュラーやっていますがまだ実力が足りないので日々練習を心掛けてます！」

練習熱心、ラッキーボーイ的存在の日向。

平林「平林雄介です。ポジションはライト。自分こんな体格ですが身長の高い人や図体がデカい人には負けません。よろしくお願いします」

小柄だが打席に立つと怖い9番バッター平林。

小松原「小松原稔です。ポジションはピッチャー。先輩の後を主に託されています……。」

クローザーを任されている小松原。

皆から困った時はコマツバーラって言ってるらしい。

中田「中田寿樹つす。ポジションはファースト。望月さんに負ける気はほとんどないです。俺がファーストのレギュラーの座を守ります」

競争心が高まるライバル中田。

絶対に負けられないファーストのレギュラー争いが始まるのか。

塩見「塩見竜也！ポジションは外野！バビューンと走って、バシツと捕って、カキンッて打つのが得意！」

こいつは何をいってんだろうか……。

戸田「戸田郁です。キャッチャーやってます。1年を纏めることを任されています」

改めて、キャッチャーは色々大変なんだなと思った。

寺田「以上がうちの仲間達だ！これからよろしくな！」

夜空は歓迎され、今日の練習は場を収め、終了した。

家に帰った俺はシャワーを浴びてご飯を食べ、部屋に戻ってベッドにダイブした。
あー……疲れた。
すると。

♪

俺のスマホから着信が。

誰だよこんな時に

画面には桜内梨子と書いてあった。

夜空「もしもし？」

梨子「あつ？ 夜空くん。今大丈夫？」

夜空「どうした梨子。こんな時間に」

梨子「あのね、今週末沼津で夏祭りが行われるんだけど……夜空くん忙しくなければ
A q o u r s 皆と一緒に行かないかなって……」

花火大会……もうそんな時期か。

夜空「いいよ」

梨子「本当？」

夜空「うん。待ち合わせは……千歌の家近くのバス停でいいな？」

梨子「あっ……うん」

夜空「了解。じゃあ明日な」

そう言って電話を切り、夜空は疲れがピークになり、眠りついた。

第13話

沼津の夏祭り当日の夕方。

練習を終えた俺は部屋で夏祭りに行く準備をしていた。

加美奈「夜空」

夜空「ん？」

準備の途中、部屋に入ってきた加美奈姉に声を掛けられた。

夜空「どしたの？俺そろそろ行かないとならないんだけど」

加美奈「あんた今日夏祭り行くのにそんな格好で行くの？」

加美奈姉が気にしたのは俺の服装。

その時の俺の服装はジャージだ。
動きやすいし。

夜空「いや流石にさ、男で浴衣着てくる人なんて相当いないよ？」

着てくる人って大抵友達同士や家族連れ、そしてカップルばかりだし。

加美奈「何あんた……もしかして……皆に浴衣見られるの恥ずかしいの？w」

夜空「なっ!？」

加美奈「ふーんw。そうなんだく恥ずかしいんだく」

今の発言ちよつとムカついた……。

確かに梨子達に見られるのはちよつと恥ずいがそこまで言われたら……! !

夜空「わーったよ!!着ればいんだろ!着れば!」

加美奈「(うわ……チョロ……)。はいはい姉ちゃんが着こなし手伝ってあげるから落ち着きなさいな(?!?)」

その顔腹立つからやめろ!

でも逆らえないから俺は加美奈姉の言うことを聞くことに。

夜空「うーん……やっぱ馴染まないな……」

加美奈「何言ってるの。よく似合ってるよ」

俺が着た浴衣は黒色のシンプルな浴衣。

流石に高校生になってまで浴衣を着るとは予想もしてなかったけど……まあ加美奈姉が満足そうだからいいか。

加美奈「ほらほら! 梨子ちゃん達待たせているんでしょ? 早く行きなさい!」

夜空「はいはい。行ってきまーす」

加美奈姉に急かされながらも俺は千歌の家へと歩いて行った。

果南「おっ、来た来た」

千歌「おーい！夜くーん！」

十千万前に近づくと千歌が手を振っていた。その近くに果南姉もいる。

夜空「ごめんごめん。遅くなったか？」

果南「全然。私も今来たばっか」

夜空「梨子は？」

千歌「もうすぐ来るって行ってたけど……」

梨子「お待ちせよ」

おっ？噂すれば。

梨子が駈け足で向かってきた。

梨子「きゃっ……！！」

夜空「……！！」

危ない！

俺は躓いて転びそうになったところを抱き抱えるように受け止めた。

夜空「ふう……危なかった……。大丈夫か？」

梨子「う……うん……。ありがとう／＼」

良かった……。梨子に怪我なくて。

怪我したらピアノどころかライブにも影響出てしまうからね。

しかし……。よく見っていると今日の梨子……。一言で言う……。綺麗だ。

ピンク色で花柄をモチーフにした浴衣にいつもと違う髪型をして花簪を翳している……。

梨子「あの……。夜空くん……。そろそろ……。離してくれないかな……。／＼」

夜空「あつ！わつ……。悪い！／＼」

梨子「もう……。／＼」

ヤバイヤバイ……。完全に見惚れていた……。

果南「……………」

千歌「果南ちゃん？」

果南「はっ！ なっ何？ 千歌」

千歌「いや…………何かポーっとしてたから…………」

果南「なっ何でもないよ！（何今の…………。もしかして私…………。いやない…………。私が夜空のこと…………）」

美渡「何やってんだー？ 早く乗りなー」

美渡さんの車に乗り、俺達は夏祭りの会場へ向かった。

車の中、隣に座ってた梨子とはさっきのことともあつて顔を向けることは出来なかつた。

曜「おーい！」

俺達が到着した頃、曜が手を振って呼んでいた。

曜の近くにはA q o u r sのメンバーも浴衣を着て待っていた。

ダイヤ「5分遅刻ですわよ？」

果南「ごめんごめん」

梨子「曜ちゃん衣装持ってきた？」

曜「もっちりろん！ちゃんと準備完了であります！」

ビシッと敬礼する曜。

ん？なぜに衣装なの？

夜空「なあ、何で衣装なんてあるんだ？」

梨子「えっ？千歌ちゃん夜空くんにはあのこと言ったの？」

千歌「あつ……忘れてた……」

えへへと笑う千歌に梨子は呆れてため息を吐いた。

梨子「えつとね、今日の夜に花火が打ち上がるの。それに合わせるように私達Aqo
ursはライブをするの」

果南「そう。私達9人がね」

果南姉の9人って言葉に力が入ってる……。

鞠莉「私、ダイヤ、果南は夜が東京に行った後……学校を救う為、スクールアイドルを始めた」

ダイヤ「だが……私達は多くの挫折に満ち、意見がぶつかり合い、スクールアイドルをやめてしまった」

果南「だけどそれをもう一度繋げてくれたのは千歌達だった」

鞠莉「チカつちがあの時導いてくれなかったら今の私達はここにいないわ」

ダイヤ「だから今度は3人だけではなく……9人で最高のライブを！」

9人でライブを……か。

果南「だから夜空、これから輝き始めるAquoursを！」

ダイヤ「これからも見守ってくださいね」

夜空「もちろんだよ」

鞠莉「よーし！ライブ始まるまで夏祭りをエンジョイしましょー！」

花丸「焼きそばにお好み焼きに焼きとうもろこし……」

善子「あんた食べることばっかじゃない！」

ルビィ「あはは……ライブあるから程々にね」

曜「ねえねえ夜くん」

曜が話しかけてきた。

夜空「どうした曜」

曜「今日の私の浴衣どうかな……?」

曜は水色とアサガオをモチーフにした浴衣を靡かせ、くるりと一周する。

夜空「よく似合ってるよ。水色が曜にあってる感じかな」

曜「えへへ／＼／＼ありがと♪」

ルビィ「夜空お兄ちゃん!ルビィは!」

夜空「おつと……」

曜と話しているとルビィちゃんが俺に飛び込んできた。

ルビィちゃんはピンク色の浴衣をしてダブルお団子ヘア、とても似合ってる。

夜空「何かいつもと違うルビイちゃんを見てる感じする」

ルビイ「それってルビイは少し成長したってことかな」

夜空「そうそう」

ルビイ「うゆ♪」

俺はルビイちゃんの頭を撫でた。

撫でられたルビイちゃんは嬉しそうだ。

しかし……。

梨子・善子「(ずるい……)」

花丸・鞠莉「(羨ましい……)」

見ていた4人は嫉妬心を燃やしていた。

俺は全く気づかなかった。

この後、俺たちは祭りを楽しんで回っていった。
ちようどいい時間……そろそろライブの時間かな。

千歌「さあ今！全力で漕ぎだそう！新しいAqoursの輝く航海へ！」

千歌「Aqours！」

『サーンシャイーン!!!』

♪ 未熟DREAMER

夜空「……………」

どんな未来かは誰もまだ知らない……………か。

確かにその通りだ。

俺もイツプスと言われても諦めず、前向いてやっとな野球部に入れた。

皆のおかげで……………俺にも少しずつ光が見えてた。

今は野手としてだけどいずれ必ずピッチャーとしてもう一度グラウンドに立つ。

それが俺の目指す輝きなんだ……。

夜空「輝いてるよ……皆」

ライブ終了後、俺はステージ裏へ。

A q o u r s の関係者ですっていったらあっさりと通してくれた。
そんなんでいいのかと思って進んでみると。

夜空「おっ？」

そこに見えるのは善子じゃないか？

皆より早く着替え終わったのかな。

夜空「善子！」

善子「ヨハネ！つてムーンじゃない……」

夜空「何してんだよこんなところで」

善子「着替え……早く終わったから皆を待っているとこよ」

夜空「そうか。じゃあ一緒に待とう」

俺は善子と一緒に他のメンバーを待つことに。

善子「ねえ……ムーン」

夜空「ん？」

善子「この前は……ごめんなさい……」

夜空「えっ……?」

善子「リリーから全て聞いたわ。あの時何も知らないであのようなこととして……本当にごめんなさい!」

俺が倒れたこと……まだ気にしていたのか……。

大切な後輩に心配かけちゃったな。

俺は善子のお団子を掴んだ。

夜空「別に気にしてないよ。あの時善子は何も知らなかったんだ。だからお前に罪はないよ」

善子「でも罪を犯した墮天使は悪魔の世界から追放……」

夜空「だから気にすんなよ!お前のせいじゃないって!」

善子「でも……でも！」

夜空「あー！もう！じゃあこうしよう！」

俺は善子の顔の前に現れ、鼻に人差し指を置く。

夜空「これからも俺を応援し続けるって契約を結んでくれたら……許してやるよ♪」

善子「なっ／＼／＼」

いきなり大胆なことに対して善子は顔真っ赤に。

善子「バーカーカー！！」

叫び声がお祭り会場に響き渡って俺達の夏祭りは幕を閉じた。

第14話

“最後まで逃げずによく攻めたな。マジで尊敬するよお前。”

これは……去年の夏大決勝の時の……。

“お前はよくやったよ。”

“後は俺達にまかせろ。”

“絶対甲子園行こうな。”

やめろ……。

“サヨナラー!!! 虹ヶ咲学園！甲子園への夢が途絶えましたー!!!”

出てくるな……!!

夜空「!!」

夢が覚めたと同時に目を覚ました。

一体何だったんだろう……：：：？7：30？

夜空「ヤツバ……！」

遅刻だ!!

急いで制服に着替え、下に降りる。

加美奈「ほいつ」

夜空「あむっ。行ってきまーす！」

下へ降り、加美奈姉からサンドイッチを口で受け取りバス停まで走って行った。

しばらく走っているとバス停が見えてくる。

沼津行きのバスが今にも出発しそうだった。

夜空「待ってくれ！乗ります乗ります！！」

ギリギリバスに乗った夜空は静真高校へと向かった。

本日の天気は快晴。

真夏の日差しが内浦を照らしている。

千歌「あーっーいー……」

花丸「ずらぁー……」

善子「うう……天の業火に闇の翼が……」

浦女の屋上では千歌、花丸、善子がこの暑さに耐えられず唸りを上げている。善子にとっては制服に黒マントを羽織っているため尚更暑そうだ。

ルビィ「その服止めたほうがいいんじゃない？」

ルビィが善子に正論を言う。

曜「どうしたんですか？全員集めて」

梨子「待って曜ちゃん全員ではないわ。夜空くんは？」

果南「夜空からはさつき私に連絡来たよ。午前中だけ練習だから終わったら学校に戻

るって」

梨子「そうですか。(私にも連絡してくればいいのに……)」

プクつと頬を膨らせながらボソツと呟く梨子。

するとンン！とダイヤが咳払いをする。

ダイヤ「さて！今日から夏休み！」

鞠莉「サマーバケーションと言えはく？」

ダイヤ「はい、あなた！」

ダイヤは千歌を指差す。

唐突に指された千歌はびっくりしなからもダイヤの質問に答える。

千歌「やっぱり……海だよね……」

千歌は曜を方を向く。

曜「夏休みはパパが帰ってくるんだ！」

夏休みの期間、お父さんが帰ってくるのが待ち遠しい曜は笑顔で答える。

花丸「マルはおばあちゃん家に」

善子「夏コミ！」

花丸が答えた後、マントを靡かせながら善子がドヤ顔で決め答え、他の皆が静寂する。

梨子「夜空くんだったら……絶対甲子園って言いそう」

果南「確かに。高校球児の夢の場所だからね」

梨子と果南は夜空がいた時の回答を予想しながら話しているとダイヤはプルプル震えだす。

ダイヤ「ブツブツ!!ですわ!!」

何か爆発したようなダイヤの怒鳴り声が響く。

ダイヤ「あなた達それでもスクールアイドルなのですか？片腹痛い……片腹痛いですわ！」

『ゴクリ……』

鞠莉とルビィ以外は喉を鳴らす。

一体これから何が始まるうとしているのだろうか。

場所変わって、静真高校グラウンド。

『遠征合宿!?!』

真島「そう。この夏休み期間、遠征で強化合宿を組んである」

全体練習が終了し、ミーティングの最中に監督の真島から強化合宿を行うとの報告が。

守「場所はどこですか？」

真島「北海道函館市だ。さらには練習試合も組んである。相手は水橋学院だ」

水橋学院って甲子園に出場している常連校だよな。

そんな強い学校とできるなんて……!

しかし函館か……沼津からだとかかなり遠いな。

真島「そして望月」

夜空「はっ、はい！」

真島「お前にはこの試合に途中からリリーフで投げてもらおう」

夜空「……!!」

リ……リリーフ……。

真島「今はスランプ等で野手に専念しているがいずれ投手としてお前を使わなければならない時がある」

夜空「……」

真島 「次回の練習からブルペンに入れ。いいな」

夜空 「はい……」

真島 「強化合宿までしばらく練習は空くが各自自主練習をすること。ストレッチをして今日は上がれ。解散！」

『ありがとうございます!!』

部員達は各自ストレッチを行い、解散となった。

帰りのバスの中、夜空は窓を眺めて監督に告げられたことを考えていた。

夜空 「いずれ投手として使わなければならない、か…」

「夜空さん？」

夜空「ん？」

考えていると誰かから声を掛けられた。

キャップを裏被りにして頬に絆創膏をしているのが特徴。

こいつ確か1年の……。

夜空「確か……郁（いく）だっけ……」

郁「はい！」

夜空「お前も内浦なのか？」

郁「はい！僕も夜空さんと同じ内浦育ちです。内浦に僕の合う学校がなくて……」

夜空「そうか……」

郁「夜空さん次回から投げられますよね？」

夜空「えっ……？まつ……まあ」

郁「じゃあ練習相手で僕が受けますよ！」

自信満々に言って笑う郁。

夜空「いや……その……ブランクがあるし……郁が構えたところに投げられるかどうか分からないし……」

イツプスが原因で本当に投げられるかもわからない。

受けてくれるのは嬉しいけど郁に迷惑は掛けられない。

郁「じゃあ明日僕と自主練しませんか？次回の練習に向けて！そうしましょ！」

夜空「まつ……まあ。それくらいなら」

郁「じゃあ明日の朝8時に旅館近くの海辺で！」

夜空「了解」

郁「じゃあ僕はこの辺で！お疲れ様でした！」

そう言い、郁はバスを降り、帰って行った。

夜空「……………」

バスは浦の星へと再び走り始めた。

学校に到着するまで夜空は何も考えず、ずっと窓を眺めていた。

第15話

夜空「お疲れ様〜って皆何してるの？」

梨子「あつ、夜空くんお疲れ様」

俺が浦の星に戻るとスクールアイドル部の部室にはAqours全員集合となっていた。

皆集まって何してるんだ？

ダイヤさんなんてホワイトボードになんか貼り出したし。

ダイヤ「いいですか皆さん！夏とさええば？」

ダイヤさんは俺の方を見ている。

夜空「こっ……甲子園……」

果南・梨子「(やつぱり……)」

果南姉と梨子は俺の答えを察し、呆れた。

ダイヤ「ぐぬぬ……どいつもこいつも……はい！ルビィ！」

ダイヤさんに振られたルビィちゃんは考える。

ルビィ「多分、ラブライブ！」

ダイヤ「さすが我が妹。かわいいでちゆねよくできましたね」

ルビィ「がんばルビィ！」

正解したルビィちゃんをダイヤさんが撫で上げている。

姉妹愛が眩しい……。

善子「何この姉妹コント……」

あつ、善子のやつぶつちやけちやった。

ダイヤ「コント言うな！」

そりゃ怒りますよね。

ダイヤ「夏と言えばライブ！その大会が開かれる季節なのです！」

夜空「あの……甲子園もその大会が開かれる季節と同じなのですが……」

ダイヤ「お黙らっしやーい!!」

夜空「ええ……」

怒られた……。

理不尽にも程があるよ……。

ダイヤ「ラブライブ予選突破目指してAqoursはこの特訓を行います！」

ダイヤさんはホワイトボードに指差す。

ルビィちゃんは瞬時にかわす、良い瞬発力だ。

ダイヤ「これは私が独自で手に入れたμ'sの合宿スケジュールですわ」

ルビィ「凄いお姉ちゃん！」

独自のルートってどんな方法で入手したんだよ……。

絶対ルビィちゃん真似しちゃダメだからね。

違法で捕まってしまうから。

ってか！何この練習メニューー！

お前らトライアスロンにでも出んのか!?

花丸「遠泳10km……」

善子「ランニング15km……」

千歌「こんなの無理だよ……」

果南「ま、なんとかかなりそうね、夜空」

夜空「なんで俺に振るの……」

果南姉の余裕はどこから出てくるんだよ……。

俺でもさすがにこのメニューは……。

ダイヤ「熱いハートがあれば何でもできますわ！」

なにその某プロレスラーの言葉真似したような台詞は。

ルビィ「ふんばルビィ！」

ルビィちゃんそれ可愛いけど皆が筋肉痛で動けなくなると言う末路が俺には見えるよ……。

曜「何でこんなやる気なの？」

鞠莉「ずっと我慢してただけに今までの想いがシャイニーしたのかも」

夜空「想いがシャイニーってどゆことよ……」

曜・梨子「……………」

そりゃあ呆れもしますわ。

ダイヤ「何をごちゃごちゃと！さあ！外に行つて始めますわよ！もちろん夜空さん、

あなたもです！」

夜空「ええ!?俺も!」

ダイヤ「この練習メニューは野球をやっているあなたにも効果的です!さあ!行きま
すわよ!」

何だよそれ……俺午前中の練習だけでもクタクタなんだけど……。

しかしまあ、良くこんな暑い中練習しようと思うよな。

今頃しいたけなんて暑さでバテているだろうな。

曜「そういえば千歌ちゃん!海の家の手伝いがあるって言っただけでなかった?」

千歌「あーそうだ、そうだよ!自治会を出してる海の家を手伝うように言われている
のです」

話題を反らし、千歌と曜はダイヤさんに敬礼をする

果南「あつ、私もだ」

果南姉もかよ。

ん？海の家の手伝いつて前に加美奈姉が言つてたような……はっ！

夜空「やっべ！俺もだ！加美奈姉に言われてたことすっかり忘れてた！」

ダイヤ「そんなあ！特訓はどうするんですの？」

ダイヤさんスゲー残念そう。

余程この特訓したかつたんだね。

千歌「残念ながら……そのスケジュールでは……」

曜「もちろん……サボりたい訳ではなく……」

夜空「俺らの都合が合わなかったということ……」

するとダイヤさんは黙ってしまふ。
数秒すると。

ダイヤ「んふ♪」

ルビィ「ピッ!？」

千歌・曜・夜空「ひい!？」

急な怖い笑みを俺らに溢してきた。

鞠莉「じゃあ♪」

“ギョッ”

夜空「へっ……?」

梨子「あっ!」

鞠莉姉が俺に腕を組んできた!?

鞠莉「昼は皆で海の家手伝って、涼しいモーニング&amp;イブニングに練習、つてことにすればいいんじゃない?」

鞠莉さん顔近いです……。

隣の梨子が怖い顔して見てるからはよ離して……。

花丸「それ賛成ずら!」

ダイヤ「それだと練習時間が……」

夜空「まあまあ、少ない練習時間でも出来ることだけを重点的にやればいいんじゃないかな」

いですか？」

ダイヤ「しかし……」

千歌「じゃあ夏休みだし、うちで合宿にしない？」

『合宿!』

千歌「ほら、うち旅館でしょ？頼んで1部屋借りれば皆泊まれるし」

曜「そっか、千歌ちゃん家なら目の前が海だもんね」

果南「移動がない分、早朝と夕方、時間を取って練習できるもんね」

花丸「でも、急に皆泊まりに行って大丈夫ずらか？」

千歌「なんとかなるよ、じゃあ決まり！」

夜空「ちよつと待つたああ!!」

「!!!?」

一部始終聞いていた俺は机を思いつきり叩いた。

千歌「いきなりどうしたの夜くん！」

夜空「どうしたもこうしたもあるか！なんで俺もその中に入っているんだよ！」

千歌「何か不満でもあるの？」

夜空「ありまくりだよ!!一部屋つてことは俺もその中に入って寝るつてことだよな
!？」

千歌「そりゃそうでしょ」

さすがに9人のなか男1人って……どこのハーレム主人公なんだよ……。

夜空 「なあ千歌、俺だけ通いつてことにはできないか？さすがにそれだと……」

千歌 「全然大丈夫だよ！ねえ皆！」

果南 「夜空、昔みたいに一緒にハグして寝ようか♪」

夜空 「え……？」

梨子 「私は……夜空くんなら何されても……／／／」

夜空 「ちよつと梨子今変なこと考えただろ!？」

花丸 「マルはまた夜空兄と一緒に本を読みたいぞら♪」

夜空「眩しい……」

善子「クツクツク……月の使者ムーンと一時の夜を過ごせるなんて墮天使として本望……！」

鞠莉「夜……寝かせないわよ……覚悟してね♪」

夜空「かつ……」

勘弁してくれええええええ
!!!!

ダイヤ「それでは、明日の朝4時に海の家集合ってことで」

朝4時!?!早すぎだろ!!

『おっ、おー……』

あつ……ダメだ。

これ皆遅れるパターンだ。

解散した後、俺は梨子に話しかけようとする。と梨子がなにやら考え込んでいた。

夜空「梨子?どした?」

梨子「えっ?ううん……。なんでもない」

夜空「お……おお。そうか」

夜空「ただいま」

加美奈「お帰り。洗濯物あるなら後で頂戴」

夜空「了解。あつ、明日から千歌ん家で合宿行うから」

加美奈「あらそうなの。志満や美渡に迷惑かけないようにね」

夜空「わかってるよ」

俺は自分の部屋に入り、着替えを済ませ、洗濯物を加美奈姉に渡そうと下へ降りようとすると足元に何か触れる。

その正体は。

夜空「……………」

俺が使っていたピッチャーのグローブだった。
手に取ると俺は監督の言葉を思い出した。

“いずれ投手としてお前を使わなければならない時がある。”

夜空「投げてみるか……………」

俺はグローブを持ってじいちゃんの部屋へ向かった。

夜空「じいちゃん」

孝蔵「なんじゃ夜空か、どうした」

俺がじいちゃんの部屋に入るとじいちゃんは新聞を読んでいた。

夜空「投げるから……受けてくれない……？」

第16話

孝蔵「珍しいな、お前から声をかけてくるなんて」

中庭、俺とじいちゃんは肩慣らしのキャッチボールをしている。
何年ぶりだろうか、じいちゃんとキャッチボールするの。

夜空「じいちゃん、そろそろ」

孝蔵「肩できたか、よし」

じいちゃんはバックネットの前に座り、ミットを構えた。

夜空「ふう……」

一息吐き、投球モーションに入る。

そして大きく振りかぶり。

夜空「っら！」

おもいつきり投げた。
しかし。

孝蔵「!!」

球速のない投球がじいちゃんの構えたところより大きく外れた。

夜空「ごめん！」

孝蔵「気にするな、次はちゃんと投げろ」

じいちゃんの返球を受け捕る。

そして再びモーションに入る。

夜空「っら！」

次も大きく外れ。

夜空「この！」

また大きく外れ。

夜空「クツソオオオ!!」

また大きく外れる。

投げ始めてから1球もじいちゃんの構えたところには投げられてない。

夜空「チツ……」

イラついて地面を蹴る。

孝蔵「落ち着け夜空。練習なんだから丁寧に投げてこい」

じいちゃんがボールを返してくるが。

夜空「あっ……」

ボールをグラブから弾いて取り損ねる。

落ちたボールをすぐさま拾う。

その時だった。

夜空「!!」

ゾクツと違和感が俺の身体を走った。

何だ……？今の――。

拾おうとしただけなのに…。

孝蔵「……………」

じいちゃんは無言で下げていた腰を上げ俺の方へ歩いてくる。

孝蔵「夜空、今日はここまでだ」

夜空「えっ…」

孝蔵「これ以上投げると肩に負担が掛かる」

夜空「待ってくれよ！まだたったの数球しか投げてないじゃないか！まだこれから…」

孝蔵「これから？数球投げて俺の構えたところに来なかった癖に何を言つとるかバカ者！」

夜空「……………！」

孝蔵「フォームは崩れ、腕が全然振れてない。お前の投げたボールからは受けても何も感じられん。ダウンして今日は上がれ。いいな」

そういうとじいちゃんは家の中へと入っていった。

その後、俺は軽くストレッチを行い、家へと入っていった。

夜空「んっ…んっ」

日が昇る前の翌日の朝に身体を伸ばして起き上がる。

時計を見ると時刻は朝3時過ぎ。

ぐっすり眠れたとは言えないが集合時間があるため早く起きた。

夜空「準備するか」

今日から千歌のところで合宿。
必要なものだけ詰めるか。

夜空「……」

ある程度、詰め込んで最後に俺が手にしていたのはピッチャー用のグラブ。
昨日のこともあるため持っていくのは……いや持っていこう。
俺はグラブをケースにしまい、カバンに入れた。

夜空「よし、行くか」

俺は部屋を出て1階へと降りた。

1階へ降りても何も音は聞こえない。

やっぱりまだ寝てるんだな、台所除いても……ん？台所のテーブルに何かあるな。
近くまで歩いて見てみるとテーブルの上にあったのは。

《今日から合宿！頑張って！》

加美奈姉からのおにぎりだった。
作ってくれたんだな。

夜空「ありがとうございます。行ってきます」

俺は家を出て、おにぎりを口にしながら集合場所へと向かっていった。

集合場所には着いたものの…。

夜空「はあ、やっぱりか」

誰も来ていなかった。

やっぱり無理があるんだよ時間的に。

言い出しつぺの張本人もいないし。

俺は座れる場所を探し、荷物を置いて座った。

“ザザーン”

海風が気持ちいい。

早起きつて久しぶりにしたな。

あつちにいた頃は朝練もあつたから良く早く起きていたから身体が馴染んでいるの
かもな。

海を眺めていると足音が聞こえてくる。誰か来たみたいだ。

誰だろうこんな朝早く。ダイヤさんかな？

「夜空兄？」

夜空「マルちゃん」

来たのはマルちゃんだった。

花丸「おはようずら」

夜空「おはよう」

花丸「まさか夜空兄が早く来ているなんて思わなかったずら」

夜空「俺は朝練とかで早起き慣れているからね。マルちゃんも良く時間ぴつたりに来れたね」

花丸「マルのお家はお寺だから早起きは慣れっこだよ。夜空兄も知ってるでしょ？」

夜空「ははっ、そうだったな」

楽しく話をしていると。

//
ぐう
//

花丸「はう／／／／」

夜空「ん？」

これはマルちゃんのお腹の音か？

花丸「お腹…空いたずら…」

夜空「もしかして朝飯食べてないのか？」

ずらと言いながらコクリと頷き、へたりと砂浜に座り込むマルちゃん。
待つて…その体勢マジ止めて…ポーズが過激過ぎる…。

夜空「はっ／／あっ…ちよつと待つてて!!」

少し見とれてた俺は鞆の中からおにぎりを取り出した。

夜空「加美奈姉が作ってくれたおにぎりあるんだ。食べるか？」

花丸「ずらあく♪」

花丸はおにぎりを受け取り、いただきますと言い食べ始めた。

花丸「美味しいぞらく♪」

本当に美味しそうに食べるよなマルちゃんは。

花丸「ごちそうさまでした！」

夜空「ははっ、あつという間だね」

するとマルちゃんは大きな欠伸を一つした。

花丸「なんだか眠くなってきたぞら…」

夜空「そうだね。これ皆まだ集まらないと思うよ絶対」

花丸「マルもそう思うぞら」

夜空「だからゆっくり休んでいいよ」

花丸「じゃあ夜空兄膝枕お願い」

夜空「はい？」

この子今なんといいました？

花丸「ほらほら、早く足を伸ばして！」

夜空 「いやいいけど何で膝枕を？」

花丸 「マルが安心して眠れるようにと夜空兄の温もりが欲しいからずら」

夜空 「でも……」

花丸 「じゃないとさつきマルをえつちな目で見ていたことを皆にバラすぞらよ？」

バレてる…。

夜空 「はい！喜んでやります！」

花丸 「よろしい♪」

結局、俺はマルちゃんの膝枕となってしまった。
マルちゃんが幸せそうならそれでいいか。

その後皆が集まった途端、俺が質問攻めにあつたのは言うまでもなかった。本当に地獄だった…。

この合宿…一体どうなるんだ？

番外編

高海千歌誕生日記念特別編

7月31日。

俺、望月夜空は最大のピンチに陥っています。

夜空「千歌への誕生日プレゼント……どうしよう……」

明日8月1日は俺の幼なじみ、高海千歌の誕生日。

それなのに俺は野球の練習が忙しいことを理由にほったらかしにし、挙げ句の果てには忘れる寸前でもあった。

マジで本当にヤバイよ……。一体どうすればいいんだ……。

夜空「こういう時には相談に限るだな……。しかし女子が好きそうな物……か」

とりあえず、家の中にいる“女子”に相談してみるか。

加美奈「千歌ちゃんが好きそうな物？」

夜空「うん」

家の中にいる「女子」というのは加美奈姉のこと。

こう見えて加美奈姉はまだ20代半ば。

そろそろ三十路近くなるから早くけっこ……

加美奈「フン！」

夜空「ひっ……！」

加美奈「あらやだ。ごめんね。何か卑猥な発言を誰かがしたみたいで」
だからってフオークを飛ばさないでよ……。

加美奈「それでなぜそんなこと聞くの？あつ千歌ちゃんの誕生日か！」

流石加美奈姉、わかってらっしゃる。

加美奈「千歌ちゃんの好きな物なんてもうわかりきってることでしょ。千歌ちゃんと
言えば何？」

千歌と言えば何って言われてもな……。

俺は頭抱えて悩む。

千歌と言えば……元気なとこや真っ直ぐなとこ。

後は美渡さんがよく言ってるバカ千歌。

後は……。

加美奈「あつ夜空みかん食べる？千歌ちゃんの家からの贈り物だけど」

夜空「うん、ありがとう」

俺は加美奈姉からみかんを受け取り、剥き始めた。

みかんか、よく千歌が食べていたな。

ん？みかん……？

あっ!!

夜空「みかんだ!!」

夜空「とは言ったものの……」

現在俺はみかんと言うキーワードを頭に沼津を歩いている。

普通のみかんなんてプレゼントにしてもな……。

何も迫力ないし。

例えばみかんを使ったスイーツとか！

ってそんな都合あることないか。

夜空「ん？」

歩いていると『ビバドーナツ』って言う走るドーナツ屋を見つけた。

ってか沼津にドーナツ屋来ていたんだ。

流石にドーナツ屋にみかんを使ったドーナツなんてないよな。

「しつ……新作ドーナツ、みかんどーナツはいつ……いかがですかー？」

夜空「……………」

何で俺の予想を裏切るかな……。

とりあえずプレゼントはみかんどーナツにするか。

「いかがですか……きやつ！」

夜空「あつ……」

チラシを配っていた店員の女の子が転んでチラシをばらまいてしまった。

「ふえええ……急いで拾わなくちゃ……」

一部始終見ていた俺がこのまま見ているのもな。
しゃあない、手伝ってあげるか。

「あつ……」

夜空「1人じゃ大変なので手伝いますよ」

「あつ……ありがとうございます！」

俺の手助けもあり、チラシは無事回収された。

「本当にありがとうございます！」

夜空「いえいえ。無事回収できて良かったよ」

ってかあの子飛んでいくチラシを追いかけて転んでばっかだったけど怪我とか大丈夫だったのかな。

夜空「そういえばこのチラシに書いてあるみかんどーナツってのを気になったのですが……」

「みかんどーナツを買いにきたんですか!？」

ズイっと俺の目の前に現れる女の子。

しかし。

「ふえええええ！」

夜空 「んが！」

俺の前に現れてびっくりし、叫びながら女の子の頭が俺の顎を強打した。

夜空 「痛たた……」

「すいませんすいません！」

もうこのやり取り嫌だ……。

早く……みかんドーナツを……。

夜空 「すいません。みかんドーナツ……10個下さい……」

「はっ……はい！ありがとうございます！店長！みかんどーナツお願いします！」

なんだかんだでみかんどーナツを購入。

店長の話によるあの子……アルバイトの角森ロナさんって言うらしい。

ドジっ子にも限度があるよ限度が。

8月1日。

お昼休み、私は夜くに連れられて屋上に向かった。

千歌「どうしたの夜くん。いきなり屋上行こうって」

夜空「いや別に……対したことじゃないんだけど……これ、一緒に食べないかなって」

そう言いながら私に見せたのは包装されたボックスみたいなもの。
そのボックスから何か良い匂いしてくる。

これはみかんの匂いだ♪

夜空「みかんどーナツなんだ。昨日沼津に行ったら偶然走るドーナツ屋さんを見つけ
てな」

千歌「すごい！これ食べていいの!？」

夜空「待った。俺も食べたい」

私達は腰掛け、ドーナツボックスからみかんどーナツを取り出し、食べた。

千歌「んー♪美味しい！」

夜空「ドーナツとみかんって合うな」

千歌「ホントだねえ。あつ？」

夜空「ん？」

千歌「えへ♪付いてるよ？」

夜くんの口元にドーナツの欠片が。
えいつ。

ペロツ。

夜空「……！！／／／／」

千歌「えへへ／／／」

恥ずかしいけど今日ぐらいいいよね！

だって今日は私の誕生日だもん！

千歌「夜くん……」

千歌「ありがとう／＼／」

桜内梨子誕生日記念特別編

ある日の放課後。

俺は現在、梨子と一緒に下校をしていた。

梨子と並んで歩いていると俺はあることが気になってしまい、梨子に話しかけた。

夜空「なあ梨子、ちよつと聞いていいか？」

梨子「どうしたの？」

夜空「何cmだっけ、お前と俺の身長差」

梨子「ええ!?!いきなりどうしたの!?!」

そりゃ驚くよな。

でも並んで歩いていたら気になってしまっただよ。

梨子「うーん……夜空くん180cmあるよね……大体30cmくらいかな」

夜空「ふーん。結構差あるんだな」

梨子「何よそれ。それって私がチビだって言いたいのか？」

夜空「へっ……？いやいや違う違う！」

梨子「ホントに？」

ヤバイ……。

梨子が頬を膨らましている……。

怒らすとマジ怖いんだよなこいつは。

夜空「ほっ……ほらさ！身長就差って誰もができない視点の2人って言うから……だからさ、なんつーかそのく今は嬉しく思う……って」

梨子「えっ……／＼／＼？」

うーわ……何言っただよ俺。

めっちゃ恥ずかしいこと言っちゃまった。

梨子「私と夜空くんの身長差は誰にもできない。つまり私と夜空くんは特別な関係ってこと……／＼／＼」

おーい桜内さーん。

俺はそこまで言っただよー？

妄想から帰ってきてください。

これ以上妄想されると非常に危険だから目を覚まさせてやるか。

夜空「てい」

梨子「痛い！」

俺は梨子の頭に軽くチョップした。

つてか今の声エロ……ゲフンゲフン、可愛かった。

夜空「全く、妄想も程々にしなよ？」

梨子「はい……」

梨子の暴走はなんとか免れた。

すると突然柔らかい風が吹き、花卉達が俺達の周りを飛んで行った。

梨子「綺麗……」

夜空「ああ……そうだな」

俺と梨子は飛んで行った花卉に見とれていた。

梨子「ふふっ。なんか思い出しちゃった」

夜空「へっ？」

梨子「夜空さんと初めて会ったこと。このように風吹いて花弁が飛んでいたよね。確かあの時は」

夜空「桜の花弁だっけ」

梨子「そうそう」

うん、今でも出会った日のこと覚えてるよ。

東京にいた時、近所にあった桜の木の下で会ったんだよな。

お互い楽しいことや辛いことがあったり、泣いたり笑ったりしながら思い出を記録していった。

季節は回り、時が過ぎて寂しさもやって来たときもあったけど俺は梨子がいたから乗り越えて来れたんだと思う。

このことから俺は桜内梨子って言う名前に対すると心音が胸に響いてしまう時が時々あった。

つまり……俺は初恋が始まってしまった。

思い出が恋へと変えてしまったのだ。

夜空「梨子、明日空いているか？」

梨子「えっ？空いているけど……」

夜空「じゃあさ、一緒にどこか出かけないか？出会った日のこと……語り合いながら」

梨子「うん、いいよ／＼私夜空くんの好きなサンドイッチ作って持ってくるね♪」

夜空「ああ！楽しみにしてるな！」

これからも一緒にずっと

新しい過去を生み出して行こう

無くしたくないメモリーに

泣いたり笑ったりしながら

終わり無き音楽にしてこう

黒澤ルビィ誕生日記念特別編

夜空「うーん……」

現在俺は今晚の夕飯のメニューを考えている。

今日加美奈姉が千歌の姉妹達と女子会に行っている為、飯を作れる人が俺しかいないってわけ。

じいちゃんも町内会の人達との集まりの為いないし。

“ピンポーン、ピンポーン”

メニューを考えていると家の呼鐘がなる。
はーいつて言いながら玄関の扉を開けた。

ダイヤ「こんばんは夜空さん」

夜空「ダイヤさん」

ルビイ「夜空お兄ちゃん！」

夜空「おつと、ルビイちゃんも一緒か」

家にやってきたのはダイヤさんとルビイちゃん。
ルビイちゃんなんて俺に飛び込んできたよ。

ダイヤ「実は加美奈さんにこれをお裾分けにきたのですが」

ダイヤさんが持っていた手提げ袋を受け取る。

夜空「これって……さつまいも？」

ダイヤ「はい。今日ルビイの為にスイートポテトを作ったのですが、少し余ってしま
いまして」

さつまいもか……。

煮物にしてもうまいし、焼き芋にしてもうまいよな。

ルビィ「あれ？今日加美奈お姉ちゃんは？」

夜空「あー……今日加美奈姉は千歌の姉妹さん達と女子会やってんだ……。じいちゃんも町内会でいいし」

ダイヤ「それでは今日は夜空さんしかいないってことですか？」

夜空「話が早くて助かります。そして今夕飯のメニューを迷っている感じですかね」

とりあえず今日はさつまいもを使ったメニューしようと思うが……何にして食べようかな。

考えているとぴゅゅゅと冷たい風が玄関越しに吹いてきた。

風を受けたダイヤさんとルビィちゃんは寒そうだ。

夜空「とりあえず、寒いから中へどうぞ。ついでにご飯も食べていって」

俺はダイヤさんとルビイちゃんを家に招き、居間へと案内した。

夜空「さて今日はさつまいもを使ったグラタンにしようかな」

冷蔵庫を探っているとシチューの粉を見つけたから手軽なグラタンにしようと思うが2人は喜んでくれるだろうか。

ルビイ「夜空お兄ちゃん！」

材料の準備をしているとルビイちゃんが台所へやってきた。

夜空「どうしたの？ルビィちゃん。出来たら呼ぶからダイヤさんと待ってて」

ルビィ「ちっ……違うの！その……」

ルビィちゃんが急にもじもじとし始める。

ルビィ「ルビィも……ルビィ一緒に作りたい！」

夜空「えっ？」

ルビィ「いつもお姉ちゃんに頼ってばかりしていたから……少しでも成長した所を見せたいな……っ。ダメかな？」

涙目をお願いしてくるルビィちゃん。

それを見たら断る訳にはいかないよね。

夜空「じゃあ、ダイヤさんが美味しいって言ってくれるようなのを一緒に作ろうか」
それを聞いたルビイの表情が一気に明るくなり。

ルビイ「うん！」

元氣全開な返事が返ってきた。

ルビイ「出来た……」

ルビイちゃんが一生懸命切った具材を俺が炒めたり、煮たりして耐熱皿に盛り付け、オーブンに入れてから10〜15分経過。

夜空「さつまいもグラタンの完成だね」

俺はオーブンからゆっくりと取り出す。

ルビィ「んー♪いい香り！」

台所にはグラタンのいい香りがしてくる。

ダイヤ「あら？いい香りですわ〜」

もちろんダイヤさんがいる居間にもグラタンの香りが届いたようだ。

夜空「よし、持っていこうかルビィちゃん」

ルビィ「はーい♪」

俺とルビィちゃんはできたてのグラタンを持って居間へ向かっていった。

夜空「はい、ダイヤさん」

ダイヤ「あら？グラタンじゃないですか。美味しそうですね」

夜空「さつきもらったさつまいもを有効に使いました」

ルビィ「お姉ちゃん！ルビィも手伝ったんだよ！」

ダイヤ「まあ、ルビィったら。よく頑張りましたね」

ルビィ「えへへ♪」

夜空「よし、じゃあ食べますか」

『いただきます!!』

ダイヤ「美味しいですわ〜♪」

ルビィ「おいもとチーズが絡んでて美味しい!」

夜空「うん、ふっくら感あって美味しいな。さつまいもも合うんだね」

良かった、2人共喜んでくれた。

旬物はやっぱり美味しいな。

『いちそうさまでした!』

ダイヤ「今日はありがとうございました」

夜空「いえいえ、俺も昔みたいに一緒に飯食べれて良かったですよ」

現在俺はダイヤさんと一緒に黒澤家へと歩いていた。

ルビイちゃんは疲れて眠っているため俺がおぶっている。

夜空「ルビイちゃん、今日は本当に頑張ったんですよ。いつもお姉ちゃんに頼ってばかりしていたから今日はルビイが成長したところを見せるんだ！って」

ダイヤ「まあ、あの子が」

夜空「さすがダイヤさんの妹ですね」

ダイヤ「当たり前ですわ。私の自慢の妹ですもの」

夜空「ふふっ。ん？」

急にルビィちゃんがんばん……つと声を出す。
寝言だろうか、何か言ってる。

ルビィ「お姉ちゃん……夜空お兄ちゃん」

“大好きだよ”

望月夜空誕生日記念特別編

今日は9月23日。

俺の誕生日でもあるが俺はいつものように野球の練習に打ち込んでいた。

夜空「ありがとうございます」

バッティング練習を終え、ゲージから出ると監督が俺の前にやってきた。

真島「望月、次は戸田を連れてブルペンで投げてこい」

夜空「はい！」

俺は1年捕手の郁を呼んでブルペンへ入った。

郁「今日はどのように投げますか？」

夜空「そうだな、とりあえずいつものようにセットで投げてみる。サイン、コースは郁に従うから」

郁「わかりました」

郁はブルペンのホームベースへと駆け出していく。

まずは肩慣らしのキャッチボールからだ。

夜空「よし、今日は普通に投げれる」

イツプスもあって投げられない状態が続いていたけど今はこうしてリハビリにも付き合ってくれているんだ。

だからこそ試合で結果残さないとな。

郁「夜空さんそろそろ……」

夜空「ああ、座つてくれ」

郁は座り、ミットを構えた。

本当……的がデカいな。

行くぞ。

俺は郁のミット目掛けて投げた。

“パァン！”

郁「ナイスボール！」

郁の返球を受け取る。

良かった、投げられた。

郁「次、変化球いきましよう！」

変化球か。

試合ではストレートが安定するまでは投げなかったけど……。
郁が出したサインは。

夜空「(スライダーか)」

スライダーのサイン。

俺はセットポジションからスライダーを投げた。

郁「……!!」

しかしベース手前でバウンドをしてしまう。

郁はそれを身体で止める。

夜空「わっ……悪い！」

俺は郁に謝った。

郁は大丈夫です！と返球してきた。

その後も前に投げていた変化球のカーブ、フォークも試してみたが全く良いところには投げられなかった。

俺のピッチング練習は50球にも及ぶ練習となった。

夜空「課題は……変化球だな」

帰り道、バスから降りた俺は練習を見直しながら家へと歩いていた。

♪

歩いていると俺のスマホに着信音が。

夜空「聖良さん？」

画面には鹿角聖良と写し出されている。

夜空「もしもし」

聖良『お疲れ様です夜空くん。今大丈夫でしょうか』

夜空「お疲れ様です聖良さん。大丈夫ですよ」

聖良『ありがとうございます！今日って夜空くんの誕生日ですよね？』

夜空「はい、そうですね……覚えててくれたんですね」

聖良『えつと……千歌さんに聞きましたので……それで！私と理亞で作った餡蜜を夜空さんの家の方に送りましたので良かったら食べてください！』

夜空「本当ですか！ありがとうございます！」

聖良『いえいえ。それと……夜空くん……』

夜空「ん？なんですか？」

聖良『また……会えますか……？』

夜空「……！／／／」

何今の甘い声……。

夜空「……。信じ続ければ……また会えますよ」

聖良『……！はい！』

夜空「じゃあ聖良さん、理亞ちゃんにもありがとうって伝えてといてくださいね」

聖良「はい！それではまた！」

聖良さんとの通話が終わった。

それにしても聖良さんと理亞ちゃんの手作りの餡蜜か。
楽しみだなく♪

聖良「ふう……」

電話を終えた私はベッドへダイブした。

聖良「緊張した……／＼／＼」

今まで異性の人と電話したことがなかったから余計緊張しました……。

“信じ続ければ……また会えますよ”

聖良「私は夜空くんが好き……。次会えたら……。この気持ちを彼に……」

その夜……。私は夜空くんのが頭から離れず眠れることはありませんでした。

クリスマス特別編

12月25日。

皆さん、何の日かご存知でしょうか。

そう、クリスマスです。

そのクリスマスの日に俺、望月夜空はというと――

夜空「おりゃあああああ!!!」

冬のオフトレーニングに励んでいた。

拓海「あんまり飛ばすと後々キツイよ〜?」

将吾「ピッチャー陣はランメニューギッシリですからね…」

健人「タイヤ引き、タイヤ押し、後はラダーサーキットなど鬼のような練習組まれてるから余計に…」

稔「でもさすが夜空さんです…。こんなメニューに付いてくるなんて」

拓海「夜はピッチャー復帰を目指してるからね。さあ僕達も頑張らないと」

拓海がパンパンを手を叩くと投手陣は練習を再開した。

今日の俺の練習は午前中にピッチャー陣のランメニューをこなし、午後にはバッティングの後にブルペンで70球の投げ込み。

オフシーズンだからこれくらいは当たり前前の練習量だ。

夜空「ふっ……！」

カキイン！

涼真「へえ。いい音して飛ぶじゃん」

午後、俺は涼真に声を掛けられ一緒に組み、ロングテーパーを行っている。

涼真はいつもカズと一緒に練習していたから他の人に声を掛けるのは本当に珍しい。

涼真「どこかのでたらめスイングの奴とは違って」

純「ああ!?! 誰がでたらめスイングだゴラア!!」

ガキイン!

ああ言いながらもちやつかりいい方向飛ぶんだよな純の打球は。

守「夜空、ロングテイク終わったか?」

夜空「あーつと…涼真、後どれくらい?」

涼真「んー後10球くらいだね」

守「わかった。終わったら俺とブルペンへ行くぞ」

夜空「おっけ」

涼真「珍しいね。マモが受けるなんて」

守「いつも郁に受けてもらってばっかではな。今度は俺が直々に受けなきゃいけない
と思ったからだ。じゃあ、終わったら声をかけてくれ」

そういうと守は戻って行った。

ロングテーパーも終わり、俺は守に声を掛けブルペンへ。

守「今日は俺のサインとリードに従って試合意識で投げてもらおうからな」
夜空「おっけ」

守は位置に付き、ミットを構える。

要求はインコース真ん中のストレート。

パァン！

守「ナイスボールだ」

守の返球を受けてる。

前よりかは投げらてるな俺。

これで今度こそ試合でいい結果残せそうだ。

和希「おっ？夜空の奴、投げてんじゃん！」

聡「はっはっは。今日は調子良いみたいだな！」

投げ続けていると、バッティング終わりの聡とカズが来た。

和希「どうよ、夜空のボールは」

守「うむ、試合よりかはスピードが上がってきている。変化球もそれなりだ」
和希「よし！じゃあ、俺が球筋見てやるか！」

カズが左打席に入った。

夜空「行くぞカズ！」

和希「おうこい！」

モーションに入り全体重を下半身に集中させ、思いっきり投げる。

守「!!」

和希「!!」

ズドオン!!

ボールは唸りを上げてミットに収まった。
なっ…何だ今の感覚は…。

聡「何だよ今の…！これは！」

聡がスピードガンを見ると驚きの急速が。

聡「160 km/hだと…」

俺の急速が160 km/hをマークし、自己最速となった。

練習も終わり、俺は内浦のクリスマスイルミネーションを見ながら家路へと歩いていった。

それにしてもまさか俺が160km/hを出すとはな…。

大谷翔平選手みたいになろうとは思わないけど、ちよつぴり嬉しい。でも俺の目標はあくまで巨人の桑畑選手だ。そこだけは変わらない。

♪♪♪

ん？歩いていると俺の携帯に着信が。

画面には桜内梨子と表示されていた。

夜空「もしもし？」

梨子《もしもし夜空くん？練習お疲れ様》

夜空「おう、ありがとう。どうした？」

梨子《あのね…今日この後、夜空くんに会いに行つていいかな？》

夜空「それって俺の家に来るってこと？それとも待ち合わせ？」

梨子《待ち合わせにしましょ。場所はいつもの海岸で》

夜空「わかった。じゃあ準備したら向かうよ」

梨子《うん。また後でね》

通話が終了し、俺は家に着くと荷物を下ろし、待ち合わせの海岸へ行く準備を始める。途中、加美奈姉にちやかされたのは言うまでもない。

海岸に到着すると梨子が先に到着していて待っていた。

夜空「ごめん、待った？」

梨子「ううん、私も今来たところ」

夜空「それで…何用？」

梨子「実はこれ、クリスマスプレゼントを渡したいと思って」

梨子が綺麗にラッピングされた袋を俺に差し出した。
俺に？ って聞くと梨子は真っ赤にしながら頷いた。
開けてみると中には。

夜空「これって…」

ローマ字でMOTHIZUKI YOZORAと刺繍されているマフラーだった。

夜空「凄い…俺の名前入りだ。本当にもらっていいの？」

「

梨子「うん。頑張って作ったから大切に使ってね♪」

夜空「もちろん、ありがとな」

梨子「どういたしまして。あっ、私がマフラー巻いてあげよっか？」

夜空「じゃあ、お願いしようかな」

梨子「はい♪」

俺は梨子にマフラーを渡した。

梨子はマフラーを俺の首元へ静かに巻き始めた。

マフラーを巻き終えたその時だった。

チュツ…。

俺と梨子の唇が重ね合った。

梨子「メリークリスマス。夜空くん」

謹賀新年特別編

夜空 「志満さーんこれはどこに置けばいいですか？」

志満 「それはここに置いといて〜」

美渡 「夜空〜こつち頼めるか〜？」

夜空 「はいはい〜！今行きまーす！」

大晦日、俺は野球部の練習納め、年末は千歌の実家 “十千万” で臨時アルバイトをしていた。

夜空 「よいしょつと」

美渡 「さすが男の子。力あるねー！」

夜空 「あだっ！」

美渡さんにバシツと背中叩かれた。

酒瓶のカゴ持ってながらだから危なかった。

裏口に酒瓶のカゴを置く。

はぁーと吐くと白い吐息が。

夜空「よし！頑張りますか！」

バシツと手を叩いて気合いを入れ直し、俺は戻っていく。

夜空「どうですか？この煮付け」

千歌父「(？ー？) b」

良かった、千歌のお父さんも満足してくれた。

千歌母「夜空くんなかなか料理の見込みあるわね！卒業したら家で働かない？」

夜空「あはは…気持ちだけ受け取っておきますね」

俺の夢はプロ野球選手ですから。

千歌「夜くーん！こっちお願いい！」

夜空「今行くー！」

まだまだ手伝うことは沢山のようだ。

千歌「今日はありがとう」

夜空「いやいや、役に立てて良かったよ」

本日のアルバイトは無事終了。

旅館も大繁盛だった。

千歌「今年ももう終わっちゃうね」

夜空「そうだな」

千歌「いろいろあったよね、スクールアイドル始めて、ライブの予選に出たりして…そして！」

千歌は俺の方へ振り向いた。

千歌「夜くんが帰ってきてくれて」

夜空「……！」

千歌「夜くんが帰ってきてまた一緒に楽しい日々が過ごせた」

そうだよな。

俺も梨子や曜、善子、マルちゃん、ルビィちゃん、果南姉、鞠莉姉、ダイヤ姉ちゃん、後は聖良さんや理亞、浦女の皆、沼津海星野球部の皆など色んな人との日々が楽しかつ

た。

夜空「俺も：同じだよ。イツプスでノコノコと帰ってきた俺を温かく迎えてくれたの
本当に嬉しかった。改めてありがとう」

千歌「どういたしまして！これからもお互いいろいろあると思うけど一緒に頑張つて
いこうね！」

夜空「ああ。もちろん」

千歌と話し終え、俺は家へと歩いていった。

千歌は良いお年を！って言いながら手を振っている。

それを見えなくなるまで俺は見ながら歩いていった。

夜空「もうすぐ年越しか」

そう思いながら歩いていった。

本当に今年はいろいろなあつた。

一度は諦めかけていた野球、それを再び輝かせてくれたのはAqoursの皆がいたから。

もう一度あの舞台に立つため、あのマウンドに立つため。

Aqoursの支えがあつたから俺はここまで来れたんだと思う。

夜空「あつ…年越した」

気づいたら0時を回り、新年を迎えていた。

夜空「明けましておめでとうございます」

海を見ながら呟いた。

その時。

♪

俺のスマホにメッセージが。

夜空「ダイヤ姉ちゃんから？」

翌日。

俺はダイヤ姉ちゃんを沼津駅で待っていた。

昨日のメールの内容は一緒に初詣行かないかという内容。
ルビィちゃんはマルちゃんや善子と行くみたい。

だったら鞠莉姉や果南姉とも思ってたが2人共都合悪いみたいらしい。
夜空「それで俺って訳か」

ダイヤ「お待たせしました！」

待っているとダイヤ姉ちゃんが到着した。

かなり息が切れている。

夜空「ちよっ、はい水！」

ダイヤ「んっ…んっ…はあ〜」

どうやら落ち着いたみたいだ。

夜空「そんなに急がなくても良かったのに…」

ダイヤ「だって…久しぶりに夜空と2人きりで一緒に初詣なんですから…楽しみで仕方なく…」

ダイヤ姉ちゃんは顔を赤くしながらホク口を掻いている。確かに2人つての小さい時ぐらいかな。久しぶり過ぎるよ。

夜空「ここで話すのもああですから行きますか」

ダイヤ「ええ。行きましょう」

俺達は近くにある神社へと向かっていった。

ダイヤ「人がいっぱいですわね」

夜空「元日だし、そりやそうだよ」

さすがにこの人混みじゃあねえ…。

はぐれたりしたら大変だからここは。

ギョツ。

ダイヤ「ふえ？」

夜空「はぐれたりしたら大変だから手を握っとくよ」

ダイヤ「あっ…はっ…ははは…はい／／／」

ダイヤ姉ちゃんめっちゃ慌てるんだけど…もしかしてまずかったかな…。

とりあえずお参りするため列に並んでおきますか。

びつくりしましたわ。

まさか夜空が手を握ってくるなんて…。

全く彼にはデリカシーってのがないのかしら…。

でもちよつとは嬉しかったですわ。

まだ私にもチャンスがあるってことですよね。

夜空「よつし、俺らの番だ」

私達は賽銭箱の前まで来ました。

私達は賽銭を入れ、お願いをしました。

私の願いは…。

夜空「ダイヤ姉ちゃんは何をお願いしたの？」

帰り道、夜空は私に何を願ったのか聞いてきた。

ダイヤ「夜空が教えてくれたら教えてあげてもよろしいですわ」

夜空「えーなんだよそれー」

ダイヤ「さあさあ、夜空はなんてお願いしたの？」

夜空「うーん、A q o u r s の皆といられますようにとか野球が上手くなりたいとか」

まあ予感的中なお願い事ですわね。

夜空「ほら！俺言ったよ！ダイヤ姉ちゃんも教えて！」

ダイヤ「私の願いは…」

夜空は喉をごくりと鳴らす。

ダイヤ「やっぱり教えません！」

夜空「ちよつと！ダイヤ姉ちゃん！」

私の願いはA q o u r sの皆と今以上に仲良くなりたい、ラブライブ優勝、そして。

夜空のずっと側にいられますように。

松浦果南誕生日記念特別編

それはまだ夜空が中学卒業前の頃の出来事だった。

果南「夜空！星を見に行こう！」

夜空「……」

夜に夜空の家に突然やってきた果南。

そしていきなり星を見に行こうと言ってきた。

夜空「……。なんで？」

果南「だってほら！夜空もうすぐ中学卒業して東京の方に行っちゃうでしょ？」

夜空「まあ…そうだけど」

果南「最後まで私と一緒に星見てもいいでしょ？ね？お願い！」

果南が手を合わせ必死にお願いしている。
それに呆れ夜空は溜め息をした。

夜空「わかったよ。付き合ってあげる」

果南「本当!?!」

夜空「でも果南姉、今浦の星ってテスト期間じゃなかったっけ？」

果南「ギクッ…」

夜空「勉強の方は大丈夫なの？」

果南「まっ…まあ何とかなるよ！それよりほら！早く準備してきて！」

夜空「はあ…後でダイヤ姉ちゃんや鞠莉姉に何か言われても知らないからな」

果南に急かされ、夜空はジャージに着替えて果南と共に家を出た。

ダイビングショップの二階、つまり果南の部屋のベランダにて。

夜空「それでどうやって星を見るの？」

果南「まあそこで待ってて」

すると果南が何か用意始めた。

夜空「これって望遠鏡？」

果南「そう！ やつとのことです。買ったんだ」

果南が用意したのは天体望遠鏡。

店の手伝いをしてお金を貯めやつとの思いで買えたらしい。

夜空「覗いていい？」

果南「うむ」

夜空は望遠鏡を覗き混んだ。

夜空「うおおお：凄い。よく見えるよ！」

果南「本当？」

夜空「うん。果南姉見てみてよ」

今度は果南が望遠鏡を覗き込む。

果南「本当だ。綺麗に見えるね」

夜空「星があんなに綺麗に見えるなんて思わなかった」

果南「夜空知ってる？あれがデネブ、アルタイル、ベガだよ」

夜空「知ってるよ……」

果南「あはは：そうだよね」

しばらく沈黙になる。

果南「いつ……ここ出るの？」

夜空「卒業式の翌日」

果南「そっか」

夜空「ちゃんと挨拶には来るよ。世話になったところには必ず」

果南「……じゃないよね」

夜空「えっ？」

果南「さよならじゃないよね……？」

夜空「……」

果南「帰って来ない……なんてことないよね？」

夜空「……」

果南「東京の高校に行って野球ばかりの生活して私のこと忘れた、ってことないよね……？」

果南の発言に夜空は返答が出来なかった。

果南「嫌だよ……私。それが一番心配で……」

果南は今にも泣きそうだった。

果南「夜空は…誰よりも大切だから…。私の大切な…「果南姉」…?」

夜空「さよならじゃないよ」

果南「えっ…?」

夜空「さよならじゃない。俺は必ずここに帰って来る。そして約束する」

《《今度は俺から星を見に行こうと誘うから。》》

そして現在。

夜空「今日は確か、果南姉の誕生日だったっけ」

夜空は今部活を終え、帰宅途中だった。

夜空「そういえば今日流れ星が見えるってニュースでやってたっけなあ。よし思い切って頼んでみようか！」

何かを思いついた夜空はある場所に向かって行った。

ある場所とはもちろんあの場所。

夜空「果南姉！星を見に行こう！」

バレンタイン特別編

2月14日。

皆さんは何の日だかお分かりでしょうか。

はいその手を上げた野球少年君。

その通り、バレンタインです。

世間では女性が男性にチョコをあげるといふイベントだがそのほかにも男性が女性にあげる所謂《逆チョコ》や友達同士にあげる友チョコなどいろんな渡し方がある。

そして俺達、静真高校野球部もバレンタインデーを迎える。

「寺田先輩！これ受け取ってください！」

守「おつ、チョコじゃないか。ありがとう」

「あつ……あの……小宮君……これあげる！」

涼真「フフツ、ありがとう」

練習終わりにグラウンドへ押し寄せてきた女子生徒からチョコをもらう守と涼真。

まあ守はキャプテンだし、涼真はルックスもいいからもらえるのは当たり前か。

「よーぞらー！」

夜空「グハッ！」

チョコを受け取ってる守と涼真を見ていると不意に蹴られた。

夜空「イテテ：何だカズか」

和希「何だとは失礼だなお前。何してんだ？」

夜空「蹴ってきてその台詞はないだろ…。あれ」

俺は守と涼真の方を指差す。

カズはあーと口開けながら言う。

和希「まああの2人は仕方ないんじゃないか、毎年あんな感じだし」

夜空「カズはどーなのよ」

和希「俺か？俺はクラスの女子からもらったぞ。義理だけだな」

ヒヤハハと笑うカズ。

和希「ちなみに純と聡、将ちゃんとケンティももらっていたな」

何!? 将吾やケンティはわかるけど口悪いアイドルバカの純と筋肉バカの聡ももらっただと!?

おっと悪く言ってしまったが本人達いないからいいか。

和希「それとほら」

カズが指す方を見ると。

「「拓海くーん!! チョコ受け取って〜!!」」

拓海「はいはい、1人ずつ受け取るから順番にね〜」

夜空「……………」

拓海のところには大勢の女子達の大行列が出来ていた…。
拓海あんな大量のチョコどうやって処理するんだろうか…。

夜空「はあ：見てるだけお腹一杯になってくるよ」

和希「お前はチョコももらえてないのか？」

夜空「朝っぱらからこっちいるんだからもらえてないよ」

和希「そうか。でもお前の学校女子高だろ？ほら噂の彼女からとかさ」

夜空「うーんどうだろな」

和希「お前、純がこの場にいたら殺されるぞ」

夜空「その前に逃げればいいのだよ。じゃあお疲れ様」

純が来ると半殺し程度じゃ済まないので早目にグラウンドを出た。

帰りに自販機でコーヒーでも買おうかな。

夜空「おっ？新しいのがある！」

自販機に珍しいコーヒーを発見。

その名は《ひとやすみるくコーヒー》。

なんとあのひとやすみるくと言うキャンディーとコーヒーのコラボレーションが実現したと言われている。

迷いなく俺は買った。

バス来るまで飲んでひと休みしよ。

俺はコーヒーのプルタブを開け、コーヒーを飲む。

はあくコーヒーが染み渡る。

夜空「はあく疲れた」

学校に戻った俺は屋上で横になる。

結局：誰にもチョコ貰えてない…。

それもそうか、俺そんなに活躍してないし。
貰えないのも当たり前か…。

夜空「……………」

責めてあいつから…彼女からチョコ…欲しかったな。

夜空「あーもう！」

らしくないよなこんなの！

俺は野球！野球しかないんだ！

落ち込んでいる暇あるんだったら練習しろってことだ！

よし、グラウンドでソフト部の機材借りて的当て練習でもするか！

俺はグローブを手に取り、外に出ようとしたその時だった。

♪

俺のスマホにメッセージが受信した。
差出人は…。

桜内梨子。

《学校の教室で待ってます》

彼に一言メッセージを送った。

梨子「ふう」

一呼吸置き、私は椅子に座る。

遂にこの時が来てしまった。

私は今日、彼に告白しなければならぬ。

というか！最近夜空くんモテすぎじゃない？

そりや秋の大会活躍したからだと思っけど…。

その後一部のメンバーが告白する！っていい始めるんだもん。そりや私焦りますよ。

でも私何かが告白していいのだろうか。

ふと窓を覗き込む。

夕焼けが明るく教室を照らしている。

東京にいた時は学校が近かった為夜空くんが練習休みの時はいつも帰り道歩いてい
た。

その時間がとても嬉しくて気付いたらそれが当たり前のようになつて。

梨子「ふふふっ」

夜空「なーに笑つてんだ梨子」

梨子「ひゃああ！夜空くん!?いつ…いつからそこに？」

夜空「今来たところだよ。本当はグラウンドで身体動かそうと思ったんだけどな」
どうしよう…今日の前にいるのに。

夜空「梨子？何で不安そうな顔してんだ？」

梨子「えっと…その…」

夜空「もしかして…」

マズイ…！告白だってバレちゃった!?

夜空「前の小テストの点数悪かったから怒ってる？」

はい？

梨子「違うわよ！馬鹿！」

夜空「へっ!?!」

期待した私が馬鹿だった！

梨子「本当に！夜空くんは野球しか頭がないのね！」

夜空「すいません…」

梨子「私の気持ちも知らないで！」

夜空「そうだよな、わかってやれなくて…気付けなくてごめん…」

梨子「でも…そういうとこ…好きだよ私は」

夜空「えっ…」

私はもう後悔しない。

もう彼にイッスを再発させたりはしない。

私が彼を守る、これからもずっと。

梨子「私は望月夜空くんが大好きです。私の思いが詰まったチョコレート、受け取ってください／＼／＼」

国木田花丸誕生日記念特別編

彼女との出会いは小学生の時だった。

学校の帰り道に彼女は同じクラスの男共にいじめを受けているのを見掛け、当時上級生だったの俺は助けに向かった。

幸い、彼女には怪我はなかったが大切な本がグシャグシャになっていた。

彼女は大切な本がグシャグシャになってしまったことに対し、泣いてしまった。

「おらの本が…初めて買ってもらった本が…」

泣いている姿を見た当時の俺はどうしたらいいのかわからなかった。

彼女を家に届け、事情を彼女の親に話した。

小学生が話したことは信じることは出来ないだろうかと思っていたが彼女の親は信じてくれ、頭を下げお礼を言っていた。

帰り道、俺は彼女の泣いている姿が頭から離れなかった。

彼女に何か出来ないだろうか。

俺は必死に考えた。

考えた挙げ句、思ったことは彼女は本を読むことが好きだと言うこと。

だったら彼女が好きそうな本を見つければいい、なんだ簡単なことじゃないか。

しかし、それは簡単ではなかった。

「……………」

本と言うのは、当時小学生だった俺の全財産では買うのは難しいというのだった。

《おらの本が…》

また彼女の悲しむ姿が浮かんでくる。

もう彼女の涙見たくない。

こうなったら……！

あれから俺は必死に家の手伝いをして本を購入するためのお金を稼いでいた。

食器洗い、洗濯、掃除、ゴミ捨てなどいつも母さん達がしていることを率先として手伝った。

そして貯めたお金10000円に満たした。

やった、これで本が買える！

俺は急いで書店へと向かっていった。

小学校にて。

本を購入した俺は彼女を探しながら校舎を歩いていた。

しかし彼女は見つからない。

どこにいるんだろう？

俺は下級生に聞いてみることに。

「国木田さんなら図書室に行きましたよ」

図書室か。

教えてくれた下級生にありがとうと言った俺は図書室へと向かった。

図書室着いた俺。

入ると誰もいない静かなところに国木田さんはいた。

「国木田さん」

声を掛けると本を読んでいた彼女は驚いた表情をしてこつちを見た。

「えつと…俺は上級生の望月夜空。国木田さんに渡したい物があつて来たんだ」

俺は袋に包まれている本を渡した。

おらに？つて言つたので俺は頷いた。

国木田さんは袋から本を取り出す。

「これ…おらが初めて買つてもらつた本…。なんで…」

「実はあの時の国木田さんが泣いているのをなんだか忘れられなくてね…。小遣い頑張つて貯めて買ったんだ…。でも初めて買つてもらつたのをまたもらうつても変かとは思うけど…」

「変じゃないすら…」

「え？」

「全然変じゃないすら！もう二度と読めないと思つてた…。また読むことができずら…。本当にありがとうございます！」

良かった。

喜んでもらえて、俺が頑張ったのが報われた。

「おら、国木田花丸です！よろしくお願いします！」

「改めて、望月夜空。よろしく」

「よろしくね夜空兄！」

…にい

夜空「……………んっ？」

ぞら兄……！

どこからか声が…。

「夜空兄!!」

夜空「うわあ！」

ガバツ!

突然声を掛けられ飛び起きる。

夜空「あつ…あれ? マルちゃん」

花丸「もう! いつまで寝てるぞら!」

えっ? いつまでって…。

夜空「今日ってなんか予定ありましたっけ?」

花丸「今日はマルとルビイちゃんと善子ちゃんて野球見に行くって約束してたじゃないぞら」

夜空「あれ？そうだったっけ」

花丸「もう！マルは本を読んで待っているから早く準備するぞら！」

夜空「わっ…わかったよ」

マルちゃんは鞆から本を取り出し、読み始める。

ん？その本……。

夜空「マルちゃん…その本」

花丸「この本ずら？この本はマルが小さい頃に王子様からもらった大切な本ずら♪」

王子様…？

夜空「その王子様って一体誰のこと？」

花丸「知らないずら」

夜空「なんだよそれ…」

花丸「それより、ルビィちゃんと善子ちゃん待たせてるんだから早く準備するぞら！」

夜空「わかったわかった！早くするから待って！」

マルちゃんに急かさながらも、準備を終えた俺はマルちゃんと共に家の外へ。出た時に善子に説教を食らい、ご飯を奢るといふ地獄を浴びさせられた。

でもマルちゃんが言った王子様って一体誰のことなんだろう。

まあいつか。今は皆で野球観戦を楽しもう！

果たしてマルちゃんが言った王子様の意味をわかるのはいつの日になるのだろうか。

ホワイトデー特別編

ホワイトデー。

バレンタインでチョコをもらった人にお返しをしなくてはならない日。

俺、望月夜空はA q o u r sの皆からチョコをもらった為、今お返し用のクッキーを作っている。

我ながらお菓子作りつてのは久しぶり過ぎるな。

前はパンケーキ作ったりして千歌達に好評だったからな。

夜空「よし、できた！」

オーブンから焼き上がったクッキーをゆっくり取り出す。

後は袋に詰めて完成だ。

夜空「喜んでくれっかな」

明日は日頃の感謝も込めて渡そう。

ホワイトデー当日。

部活を終えた俺は現在、バスで浦の星に移動している。

俺は『これからそっち戻るよ』とA q o u r sのグループLINEにメッセージを送った。

すると千歌からOK!のスタンプを送られてきた。

はあ…緊張する。

こんなにお返しを渡すのって緊張するものかと思いつつも俺はバスに揺られていた。

しばらくバスに揺られ、浦の星に到着した。

俺はスクールアイドル部の部室にはいるとそこにはA q o u r sメンバーがいた。

千歌「あつ、夜くんお疲れ様！」

夜空「お疲れ、練習はどうだ？」

果南「今は一通り終わってミーティングしていたとこだよ」

曜「ところで夜くん、今日早く戻って来たのはいいけど何かあるの？」

善子「まさか…地獄からの御告げを…」

花丸「違うずら」

善子「早っ！」

夜空「あー…実は皆に渡したいのがあってな」

鞠莉「ホワット？何か持ってきたの？」

俺は鞆から取り出す。

良かった、どこも崩れてないし粉碎されてもない。

ダイヤ「これは、クッキーですか？」

夜空「うん、今日ホワイトデーだからさ。日頃の感謝を込めて」

ルビィ「あつ！見てみて！色んなのがあるよ！」

ルビィちゃんの一言で皆がクッキーを見始める。

梨子「本当ね。音符の形にクマの形」

果南「あつ、イルカもある♪」

曜「見てみて！うちっちーもあるよ！」

夜空「皆が好きそうなのを型通りにしたんだ」

ダイヤ「本当に…良く出来てますわね」

鞠莉「元々、夜は女子力が高いから。本人は気付いているのかはわからないけど」

善子「このゲマ可愛くて食べるのもつたいないわね…」

花丸「善子ちゃんいららない？マルがもらうずら〜」

善子「ダメに決まってるじゃない！後ヨハネ！」

千歌「ねえねえ！夜くん食べていい？」

夜空「いいよ」

皆はそれぞれクッキーを1枚取り出し、食べた。

『美味し〜〜い!!』

良かった、この言葉さえ聞けて満足。

夜空「皆喉乾くだろ？紅茶入れるからクッキー味わって待っててくれ」

紅茶を入れる準備をしたその時だった。

トントンと背中を叩かれる。

振り向いた時、えいと俺の口にクッキーを運ばれる。

夜空「りっ…梨子…？」

梨子「ふふっ、びっくりした？」

夜空「そりゃびつくりするよ…」

千歌「あー！梨子ちゃんずるーい！」

花丸「マルだつて夜空兄に食べさせたいずら！」

ダイヤ「皆さんここは順番に！」

夜空「あ…あはは…」

結局こうなるのか。

でも皆で食べ合いでするのも悪くない…かな。

渡辺曜誕生日記念特別編

『明日、家で曜ちゃんの誕生日パーティーやるから夜くんも来てね!』

夜空「……」

千歌からのLINEの内容を見た俺は唾然とする。

明日…曜の誕生日じゃん。

夜空「ヤバイ何も用意していないや…」

でも曜のことだから何あげても喜ぶとは思うが…どうしようかな。

取り敢えず出掛けながらも何か考えますか。

夜空「取り敢えずノープランで沼津には来たが」

何も思い付かずただ歩いているだけだった。

曜には何が合うかな〜って思いながらも商店街を通り過ぎて行く。

夜空「アクセサリーやストラップもいいけど、確かあいつに前買つてあげたような気がするんだよな」

沼津で行われたジャイアンツの試合を一緒に観戦しに行つた時、物販で買ったストラップを付けていたことを思い出し、身に付ける系の物は却下という方向へ。

悩みに悩む曜のプレゼント。

そして俺の次の目的地は三津シーパラダイスへと向かった。

みとしーに着いた俺はグッズショップへ。

グッズショップには曜の大好きなキャラクター『うちっちー』をデザインとしたグッズが並べられている。

夜空「おっ？これ可愛い」

目にしたのはうちっちーのいろんな表情を絵柄にしたクッキーだった。
クッキーなら曜も喜ぶんじやないかな、食べるのもつたいないっていいそうだけど。
よし、これに決めた。

クツキーを買ってグッズショップを出たその時、俺の目の前に見えたのはみとしーの
キアラクターうちっちーだった。

うちっちーは俺に近づいてくる。

夜空「……？」

迫りくるうちっちーに声が出ない俺。

つてかうちっちー近すぎじゃないか!?

うちっちーは俺が買ったクツキーを取った。

夜空「ちよっ!?何するんだうちっちー!」

俺はうちっちーからクツキーを取り返そうとしたその時。

うちっちーが黒ペンで○に『う』と書いていた。

こいつもしかして曜の誕生日を…。

書き終えたうちっちーは俺にクツキーを返してくれた。

うちっちーは満足そうに帰って行った。

夜空「うちっちー、お前も曜の誕生日を祝いたかったんだな」

うちっちーの分も一緒に祝ってあげようと思った。

迎えた4月17日。

曜の誕生日。

曜はA q o u r sの皆からプレゼントをもらっていた。
そして俺の順番が来た。

夜空「曜、誕生日おめでとう。これ、『俺達』から」
曜「えっ？『俺達』？」

曜は困惑している。

まあそうだよな。

夜空「ちやーんと見てみな」

曜はクッキーの袋を隅々まで確認する。
すると何か見つけたような表情を。

曜「夜くんこれ！」

夜空「そう、うちっちーのサインだ。買いに行つた時偶然見かけてさ」
曜「そうだったんだ！うちっちーにもお礼言わないと！」

夜空「今度一緒に行こうか」

曜「うん！」

こうして曜の誕生日パーティーは大盛況に盛り上がって幕を閉じた。
後日、俺は曜と共にうちっちーに戯れたことはまた別の話。

小原鞠莉誕生日記念特別編

あの日、君の声がなかったら俺はどうなっていただろうか。

君の背中を押してくれた言葉がなかったら俺はどうなっていただろうか。

鞠莉姉…。

9 回裏、俺はファーストからマウンドに立った。

“夜空ー!!”

“頼むぞー!!”

聞こえる…。

皆の声が…。

大丈夫…投げられる！

夜空「んっ！」

『ボール！』

コース外れボール。

2球目。

『ストライク！』

外低めのコースに真っ直ぐが入り、ストライク。

よし…イケる！

3球目。

夜空「あつ……！」

投げたボールがレフト前に運ばれノーアウト1塁。

その後も真っ直ぐ、変化球が甘くなり連打を浴びてしまう。

ノーアウト満塁。

最悪な状況を作ってしまった。

『タイム！』

タイムを取り、皆がマウンドにやつと来た。

守「ノーアウト満塁、最悪な状況だな」

夜空「……」

涼真「焦りすぎ。それとも何？俺が投げればもう勝ったと思ってるの？」

夜空「……」

和希「涼、言い過ぎだぞ」

涼真「これくらい言わないとこいつ目が覚めないでしょ」

聡「はっはっは！ピンチはチャンスだ！」

寿樹「聡先輩はこの状況でも相変わらず前向きですね…」

夜空「…ん…」

守「ん？」

夜空「ごめん…皆…」

守「……。夜空、あれ」

夜空「えっ？」

守が指差す方へと向く。

そこには。

鞠莉「頑張れ!!!!
夜————!!!!
!!!!」

声援を送り続けている鞠莉姉の姿が。

夜空「鞠莉姉……!」

守「なっ? 見えないところでも見ているんだよ。お前……周り良く見てみなよ」

周りを見る……。

守に言われた通りに周りを見渡す。

守「お前には頼りになる仲間がいるだろ?」

そして……と守は付け加え。

守「応援にきてくれた鞠莉さんに負けた姿、見せたくないだろ？」

守は俺の胸にミットを当てた。

守「全力で投げろ！恐れるな！お前の周りには俺らがいる！皆絶対守ってやれよ！」

寿樹「必ず守ります！任せてください」

涼真「まあ、期待は1/2してるから」

和希「もう何も考えなくていいぜ？お前はお前らしく、な！」

聡「はっはっは！笑顔を忘れずにな！」

皆……。

守「行くぞ！」

“しやあああああ
!!!!”

再び気合を入れ、皆が守備位置に戻っていく。

太陽の光が俺を照らしている。

夜空「シャイニー…」

鞠莉姉がいつもも言っている台詞を口ずさむ。

大丈夫だよ鞠莉姉。

そんな難しい顔しないで見てて。

俺の輝く姿を………！

守「こい!!夜空!!」

夜空「うおおおおお
!!!!!!」

“ねえ夜。”

“なに?”

“明日試合でしょ?”

“そうだけど…それがどうしたの?”

“マウンド立つの?”

“多分、試合の状況次第で。”

“怖くないの?”

“…、怖いよ。でも怖がってちゃあ前には進めないんだ。”

“夜…。”

“心配してくれてありがとう。俺は大丈夫だから。”

“夜、怖くなった時は私みたいに『シャイニー!』って言ってみて! スツキリするか
ら!”

“おまじないみたいな物かな。機会あればやってみるよ。”

“明日頑張つてね。私絶対応援行くから!!”

ありがとう鞠莉姉。

君が支えてくれたから俺はここまで来れた。

今度は俺が試合に勝って恩を返す番だ。

『ストライク！バッターアウト！ゲームセット!!』

ノーアウト満塁のピンチを俺は別人になったような変わり果てたピッチングで三者連続三振に抑え、試合を勝利で終えた。

試合の帰り際。

夜空「ん」

鞠莉「えっ？」

夜空「今日のウイニングボール。これ鞠莉姉にあげる予定だった」

鞠莉「でも…夜がもらったボールでしょ？夜が持つてなくていいの？」

夜空「誕生日…」

鞠莉「……………！」

夜空「今日、誕生日でしょ。だから勝つて祝えて良かった」

鞠莉「夜……………！」

鞠莉姉は涙を流しながら俺に抱きついてきた。

夜空「おめでとう鞠莉姉そして……」

ありがとう。

津島善子誕生日記念特別編

夜空「どうですか？健人さん」

健人「うん、前よりもフォームが安定してきてる。これなら次の試合でいい投球ができると思うよ」

夜空「本当ですか!？」

現在、俺は沼津の市民球場に来ている。

そこでは今日巨人対ヤクルトの試合が行われる。

試合に先発予定の桑畑健人さんから突然俺に連絡し、共に練習しないかと誘われ俺は今に至る。

夜空「でもいいんですか健人さん、試合前ですよね？」

健人「何言ってるの。せっかく沼津に来たんだから夜空の顔見ないとエンジンからんでしょ」

夜空「そりや嬉しいですが…」

健人「それにイッブスに悩んでいるのを少しでも和らげてやらないと将来共に戦えないからな」

ん？将来共につて…。

夜空「健人さんそれって…」

健人「おっと！次俺バツテイニングだった！じゃあな夜空。今日の投球、絶対忘れんなよー！」

ああ…行っちゃった。

「あいつは何気君を期待しとるみたいやからな」

えっ…この声は。

夜空「坂本さん!?!」

坂本「やあ。君が健人の言ってた夜空くんやな」

ほっ…本物の坂本選手だ。

テレビで見るよりもカッコいい…。

坂本「あいつが「後輩できた!」って言うから何のこっちゃやっと思っただけどホンマやっただんだな」

夜空「あの…健人さんは自分を期待してるってどういうことですか?」

坂本「そのままの意味だよ。俺と似ている奴がいる! って言っつと気になっていたみたいやからな」

坂本さんはそれとと付け加える。

坂本「あいつはジャイアンツで夜空くんが入団するのを待っている。もちろん、キャプテンの俺もな」

夜空「…!」

坂本「待っているぞ」

夜空「はい…!」

坂本さんがその場から離れようとする。

あつ：待った。

坂本さんといえば確かあいつファンだったよな。

夜空「坂本さん待ってください！」

坂本「ん？どした」

夜空「あの！サイン：頂けないでしょうか？」

坂本「サインか、いいよ」

坂本さんはボールを取り出し、サインを書き始める。
サインの宛は。

津島善子ちゃんへ。

7 / 13。

あの堕天使の誕生日でもある。

今日はあいつを祝うため俺の家に呼んだ。

じいちゃんも加美奈姉もいない。

つまり

夜空「2人きり……」

ってかあいつの誕生日なのにカレーで良かったのか……!?

でも電話で聞いたところ俺のカレーが食べたいって言ってたし……。

後あいつの好きなイチゴのチョコレートケーキも用意したし……。

後は来るのを待つだけ。

1時間後。

夜空「遅い……」

何やってんだよあの墮天使は。

カレー冷めちまうよ。

まさか道に迷ったとかバスが遅れたとかじゃないだろうな。
いや善子のことだからあり得るかも。

“ピンポン”

予鈴がなった。

やつと来たか。

夜空「おい善子、お前どこ……オブツ……！」

善子が急に飛び付いてきた。

善子「……………っっ」

夜空「おまつ…泥んこじゃねえか!どうしたんだよ!」

善子「ムーンの家に向かっていたらヒール折れちゃって…」

夜空「それは災難だったな…。いいからシャワー浴びてきな。服は加美奈姉の使え」

善子「ヨハネ降臨!」

夜空「はいはい、いいから早く座りな」

シャワーから帰ってきたらすぐヨハネポーズだもんなこいつ。

見慣れたけど。

善子「クツクツク…今日はこの墮天使ヨハネの生誕を大いに奮ってくれたことに感謝するわ…リトルデーモンムーン」

夜空「はいはいありがたきオコトバー」

善子「ちよっ…少しは乗りなさいよ！」

夜空「1時間も待った俺はどーしろと？」

善子「ううっ…」

夜空「食べようぜ」

善子「うん…」

『いただきます！』

俺のカレーはどうやら善子の口に合ったようだ。

後掛けスパイスを用意しといて良かった。

夜空「ようし、今日のメインだ」

俺は冷蔵庫からイチゴのチョコケーキを持ってきた。

善子は目がキラキラしている。

夜空「これだけじゃないんだな」

善子「えっ？」

夜空「ほり」

善子「きやつ…おとつと…これって…！」

夜空「そつ、坂本選手のサインボールだ」

善子「ちゃんと私の名前が…！」

夜空「俺が頭下げて頼んだんだから大切にしなよ」

善子「うん…ありがとう」

かくして善子の誕生日は幕を閉じた。

A q o u r s メンバーの一部は夜空を気にしている。
果たしてその結末は如何に。